
涙のふるさと

マカロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙のふるさと

【Nコード】

N58000

【作者名】

マカロン

【あらすじ】

江戸川コナンと灰原哀とオリジナルキャラクターの倉本柚。三人が送る春から夏にかけての物語。

最初に読んでください

- ・このお話は主にオリジナルキャラクターの倉本柚を視点に作ります。なのでコナンや哀に比べて柚の出番のほうが多いです。
- ・物語後半部分に血表現が出ますので苦手な方は戻るボタンをクリックをお願いします。
- ・このお話のカップリングはコ哀のようなそうでないような感じですよ。曖昧ですいません。しかしこの二人中心で物語は進んでいく予定です。

・あと、物語中の「彼」はコナンのこと、「彼女」は哀のことと想っていたければ有難いです。

以上が注意事項です。

文章力があまり良くないので読み辛い部分もありますが最後まで頑張りますのでよろしくお願いします。

各話タイトルは確かに恋だった様 (<http://85.xmbs.jp/utis/>) から頂きました。ありがとうございます。

瞳の奥に恋が、揺らめく

この出来事は絶対に忘れない、私の初恋。切なくてちよっぴり幸せだったこの思い出は彼と彼女の間にもどう映えているのだろう。

一人の女は思い出すように空を見た。

「袖　！！やったよ！！私たちまた同じクラスッ！！」

展示板に貼られているクラス発表を見てキヤツキヤツとはしゃいでいる二人。周りも見えずにまたいっぱい話そうね。なんていう友達に安心したかのように笑う少女の名は倉本袖。

袖は三か月前、今年の一月にこの町に引っ越してきたばかりだった。もともと袖は幼いころから父親の仕事の都合で転校の繰り返しが多かったため友達も少なく、また転校の二文字でクラスや学年中に注目されていたため大人しく引っ込み思案な性格になってしまった。

今回も本当は転校する前だということにもう登校拒否したいと思っていた程だ。嫌々に学校へ行き、恥ずかしいため少し小さ目な声で自己紹介をした矢先、積極的に話しかけてきてくれた子がいて意外にあっさりと友達が出来た。それが目の前にいる友達、智慧だ。

多分智慧と一緒にのクラスになれたのはそんな袖に先生が気を遣ったのだろう。もちろんそれを袖は知っていて心の中で先生にお礼を言う。

そしてもう一度自分のクラス表を見るとちらちらと何人か知っている名前がいた。多分前同じクラスだった人だろう。もしかしたら顔を見れば分かるかも…なんて思いながらも上から名前を見ているとある人の名前に袖は少し首を傾げる。

「…江戸川…コナン？」

そういえばどこかでコナン・ドイルという名前を聞いたことがある。親はそれを参考にしたのか、しかしあまりにも日本人離れしている名前なのでもしかしたら外人かもしれない…しかしハーフの可能性もある。

そう思いながら柚は頭の中に人物像を描いた。それは鼻がシュツとしていて目は青。輪郭は長細くて金髪の人が『Oh!!!』と言っている姿。まるで中学の英語の教科書の登場人物そのものを考えてしまっと思って吹き出してしまった。

「どうしたの？」

友達が柚の顔を不思議そうに覗き込むとそんなに盛大に吹き出してしまったのかと柚は少しばかり恥ずかしくなりながら、でもまだ自分の想像図の面白さに少し笑いながらその『江戸川コナン』と書かれている文字を指さして言った。

「なんか江戸川コナンって変わった名前だねって思ってた…」

本人には可哀そうだけど。と付け加えて笑ったため溢れてきた涙を拭くと友達は目を大きく二回瞬きして柚の肩に手を置いて乗り出すようにクラス表…否、正確に言うとう江戸川コナンの名前をまじまじと見ていた。そんな友達のいきなりの行動なので柚は驚き「どうしたの」と声をかけようと口を開くとその前に友達が声を上げた。

「やった！！江戸川君と同じクラスだ！！」

「え？何？」

友達のはしゃいでいる様子に柚は目を丸くして聞くと「当たり前じゃん！！1/8の可能性なんだよ」ととても喜んでいたが転校したての柚には意味が分からない。唯でさえ同じクラスの生徒を覚えるのに必死だったので他のクラスの生徒まで覚える余裕がなかったのだ。しかしその江戸川コナンという人物は相当人気のある人なのだ。と理解できた。そういえば廊下を歩いているとき、「江戸川君カッコいいよね」と言っていた女子がいたような気がする。

（まあ外人は顔立ちがいいからなあ）

きつと自分の想像していた英語の教科書の登場人物のような顔より

も数倍カッコいいのだろう。とその江戸川コナンの名前を重視している隣にいた友達が急にブレザーの袖を引っ張り黄色い声を上げた。

「ほらっ！！あれが江戸川コナン君よっ！！」

友達が指さす方に目を向けた瞬間、柚は大きく目を見開いた。

（あれ…？日本人？）

距離が離れている上に彼の横顔しか見られないが、黒髪に黄色い肌はどう見てもアジア系の顔立ち。自分の想像図とは180度違うのでいろいろな意味で驚きを隠せない。

そんなこともお構いなしの友達は「やっぱりカッコいいよね」なんて言いながら目を輝かしている。

しかし彼を見てうっとりしている人は友達だけではないらしい。周りを見ると女子のほとんどが彼を見ている。中には「江戸川君よ」なんてこそそそと話している人もいた。

まるで漫画で描いたような王子様だ。

柚はそう思いながら彼を見る。

その時まだ柚は知らなかった。自分が彼と大いに関係することを。

そして彼が探していた一人の少女と関わることも。

瞳の奥に恋が、揺らめく (後書き)

タイトル提供 確かに恋だった

これは一時の戯れ

「あ……」

柚達は決められたクラスの教室に入り、一旦荷物を置くために黒板に記入されている席に腰を下ろして筆記用具を机の中に仕舞う。そして鞆を机の横に掛けるため不意に横を向くとある人物に視線が留まる。

柚の目線の先には先ほど噂をしていた彼の姿。今は寝ているのか机に顔を伏せている。

（隣……だったんだ……）

鞆を机の横に掛けようとする動作をすっかり忘れており、まるで彼の寝顔を覗いている格好になっているが柚は自分の動作に気づきもしない。それよりも先ほど口に零れてしまった声に彼は気づいて起きてしまうかもしれないということに柚は彼が起きないように願っていた。幸い彼はまだ夢の中だ。しかしこれから何か月は彼とこうやって隣の席で過ごしていくのかと思うと何か変に緊張してしまう。まともに窓側を見られない。

「ん……」

彼が漏らした声に柚はハツとして止まっていた手を動かし視線を黒板に移した。

もう隣の存在感に心臓は鼓動を速めて新担任の話なんて耳にも入らなかった。ただ聞こえてきたのは周りにいた女子の彼についての話と彼のたまに聞こえる寝息のみ。

「よかったね。席、隣で」

始業式が終わり、教室に戻るため渡り廊下を歩いていると後ろから

声をかけられた。その声の主はたった一人しかいない。

「智慧：良かったって、私は何か変な緊張するから嫌だな…」

「あんた何言ってるの！！あの席は大半の女子が欲しがっていた席だよ。それを嫌だなんて…柚はラッキーガールなんだからちゃんとしてやっただけよ。喜んでなさい！」

ラッキーガールって…そんなに彼のことを見ている女の子は多いのか。

柚は知らず知らずのため息をついた。

確かに彼は噂では頭がものすごくきれいな人でスポーツも万能、特にサッカーはJリーグに行けるほどと聞く。性格もクールというか大人っぽいというか…でもたまに見せる笑顔が素敵らしい。これらの情報はさつき教室に向かう時に智慧から聞いた話だが、でも確かに見た目は平均の上くらいだろう。

心の中で評論家になりかけていた柚はハッと我に振り返り首を左右に振る。

「ねえ…休み時間になったら智慧の席に行ってもいい？」

「…え？いいけど…そんなに江戸川君のこと嫌いな？」

「うっん、そんなことはないけど…」

柚は小さいころから転校の繰り返しだったためよく学校中目立っていた。最悪では中途半端な時期に転校してきただけの理由でガキ大将と言われる子から嫌がらせを受けて嫌な思いをしたこともある。それがトラウマになってしまったのか違う意味でも目立っている彼の存在はとても苦手な部類に入っていた。

（江戸川君はなにも悪くないんだけどね…）

心の中で彼に謝罪をしつつ、いつの間にか着いた教室のドアを開けるとまた彼はうつ伏せに寝ていた。始業式には参加していないのだろう。

一瞬死んでいるのかと思ったが背中が上下に動いているのを見てフウとため息を吐きながら席に座る。それでもなかなか起きない彼に少し苦笑いをした。

そういえば彼が起きている姿を見たのはたった一度だけだ。と言っても今日初めて会ったというか彼を見てしかも一度も会話を交わしていないのだから。

（智慧は江戸川君のことをああ言っただけだ…本当はどんな人なのだろう？）

袖にとつて彼は苦手な存在であつたが少しばかりが興味もあつた。なんせあんな女子から黄色い声を浴びる王子様の存在の男子なんて転校の繰り返しの袖でも現実世界で初めて見る光景だ。気にならな

いと言えは嘘になる。

（王子様って言つても…捻くれていそうな王子様だけだ）
そう思いながら袖は頬杖をついて彼を見た。リズムカルに動いている肩に似合わないメガネの奥にはしっかりと閉じられている目。そして少しはみ出ている長い睫。確かにこれはモテそうだと目を細めてジッと彼を見ていた。

これは一時の戯れ（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

だから、君を

入学式から1か月が経った。

少しずつ馴染めてきたクラスの教室のドアを開けて挨拶を交わす。最初はあまり友達がいなかったが智慧のおかげで数人友達が出来た。転校ばかりの袖にとって友達作りも最大の難問であったので智慧という友人は救世主みたいなものだった。

「袖！！おはよ」

「あ、おはよー」

袖の席の前に立った智慧に挨拶を交わして鞆の中の勉強道具を机の中にしまう。そしてチラリと隣の席を見たが彼はまだいない。鞆も掛けていないということはまだ登校前なのか。

この一か月袖は隣同士だというのにまだ一回も彼と話していなかった。起きている顔はさすがに一か月経っているのだから何回か見たことはあるが彼はいわゆるサボリ魔なのか、空席が多かった。だから一か月前にあった彼への緊張感もすっかりなくなり、こうして智慧が袖の席に向かつて平気になったのだ。

しかしこの一か月間彼への疑問は増えている。誰かを探すように外をみるあの表情。そして偶然見ってしまった告白現場で彼が言った好きな人。まあそれは付き合うことを断る言い訳に過ぎないが。そして袖の最大の疑問は彼がいつもみている携帯の中身。一回チラリと見たが色鮮やかに映る液晶画面。あれは間違いなく写真画像。その度に彼が悲しい顔をしているのも知っている。これ以上プライバシーに土足で踏み込んではいけなと思うとどまったがやはり気になっっているのも現実。

そして袖は智慧を少しだけ話してHRが始まると同時に智慧は自分の席に戻っていく。

袖は再度横目で彼の席を見たがやはり空席のまま。

今日も彼は来なかった。

「はあ……」

そして昼休みに入り、立ち入り禁止の屋上。柚は屋上に腰を下ろしていた。

最初は興味本位で屋上に行ったのだがまさか鍵が開いているとは思ってもせず気が付いたらこんなところで座っている自分がいた。

（こんなことで目立つのを嫌がる私なのに何やってるんだろ）

確かに小さいころは冒険とか好きだったけど……と自分に呆れるようにハハハと笑う。

まあたまにはいいかなと思って立ち上がり柵にもたれかかりグラウンドを見るとバレーをしている生徒にテニスコートでラリーをしている生徒、ベンチで話している生徒もいる。

そしてそれらの中でも柚はサッカーをしている生徒たちに目が留まった。

（そういえば彼もサッカーが得意だ。なんて言ってたような）

もしかしたらあの集団の中に彼がいるかもしれないと探してみたがさすがに今日欠席している人がここにいるはずはないと苦笑いをする。

そしてなんとなくずっとグラウンドを見ていると予鈴のチャイムが校内中に響き渡る。昼休み終了もあと僅か。今までサッカーやバレーをしていた生徒も一斉に校舎に戻っていく。

柚も教室に戻ろうともたれかかっていた柵に離れた瞬間、ギイとドアが開く音がして柚は肩を大きく震わせた。

（どうしよう！！先生に見つかった！？）

内心ドキドキしながら恐る恐る振り向く。

どうか優しい先生でこの行動を見逃してくれますようにと閉じていた目をゆっくり開けるとそこには意外な人物が立っていた。

「…あれ？先客いたんだ」

柚は目を大きく見開いてポカンと相手を見ている。

（なんで？）

柚がそう思うのも当たり前だろう。目の前には今まで授業に参加していなかった彼、江戸川コナンの姿があったのだから。

だから、君を（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

片時も離れないあの感覚

「君もサボリ？」

「え？あ、うん！！サボリ！！！」

そういつてすぐに視線をグラウンドに戻す。予想もなかったいきなりのご対面なので袖の心臓は破裂しそうになっていた。本当はすぐにでも逃げ出したかったが思うように足が動かないうえ、今さっき口を滑らせてサボリと言ってしまったため移動しにくくなってしまい立ち尽くす。

彼はフーンと言うと柵にもたれ掛るように座り、手に持っていた袋からパンを取り出して食べ始める。

そういえば袖はまだお昼ご飯を食べていなかった。

そもそも屋上に行こうと教室を出たわけではないのだ。ただお弁当を持ってきていなかったので食堂にある購買にパンを買いに行こうと思って廊下を歩いていると偶然屋上に繋がる階段を目にしてしまったのが事の始まり。そこから興味本位でここに来てしまったのだ。（でも今買いに行ってももう購買閉まつてるからな）

そう考えるとだんだんお腹が減っていく。人間の三大欲求は性欲と睡眠欲、あとは食欲というくらいだから空腹には我慢できないのだろう。ああ、これなら好奇心を我慢して購買でパンを買っとくべきだった。と袖は後悔した。しかし転校して4か月。まだまだ知らないところがたくさんある袖にとってこのような探検はワクワクするようなもので。

「…なあ、さっきからこっち見てるけど…どうした？」

「え？」

困ったようにこっちを見る彼にハッと我に返る袖。無意識にずっと彼を見ていたのだ。正確には彼が食べようとしているパンなのだが、少し間が空いて袖はみるみる顔を赤らめた。そしてそれと同時に袖

のお腹の虫が鳴く。

「あ……」

彼が少し声を漏らして柚は恥ずかしさの頂点に立っていた。お腹を押さえてしゃがみこみ、真つ赤な顔で彼を見つめて。彼もそんな柚の行動に何を言えばいいのか分からなくなったのだろう、固まったまま柚を見ている。そして二人の沈黙が長く続いた。

「あの……聞こえました？」

その沈黙を破るように恐る恐る柚は彼に問いたですと彼は「あ、あ……」と申し訳なさそうにゆっくりと首を縦に振った。その行動に柚はますます恥ずかしくなり少しだけ顔を疼くまる。

「……ごめんなさい！！もう私のことなんか気にしなくてもいいので食べてください！！」

柚は彼に向かってそういうと少しだけ離れて彼と同じように柵にもたれて座る。二人の距離は2メートルくらい離れていた。本当はここから逃げ出したかったが今は授業中。今頃教室に入ると注目の的になってしまう。それだけは絶対に嫌だ。

（穴があつたら入りたいつてこういうことなんだな……）

そしてまた長い沈黙の中、風が優しく吹き始める。彼をチラリとみると空を見上げていた。柚も同じように空を見上げる。青い空に雲がゆらゆらと右から左へと移動しているのが分かった。

（あ……いい天気だな）

目を細めて手のひらを太陽にあてると少しだけ自分の手が透けて見えた。確かそのような歌があつたような……そっぴいえば高校生になつてから幼い時のように空を見ることが少なくなった。よく父親に公園など連れて行ってもらつたときは空や雲を見てあの雲は何の形に似ているとかいつていたのに。

柚は体育座りをしながらずっと上を向いていた。首もそろそろ痛くなり始めて前を向こうかと思つたとき、目の前にパンが現れて少し固まる。

「やるよ」

パン越しに彼の声が聞こえた。きっとこのパンの持ち主も彼なのだろう。

柚は目の前のパンを受け取ると彼の姿が見えて少しだけドキツとした。彼は笑っていたのだ。

そして彼も柚の横に腰を下ろして再びパンを食べ始める。その姿にもドキドキしながらお礼を言いそびれた柚は申し訳なさそうにパンの袋を開けてパンを口に含んだ。

「んっ」

柚がパンを口に含んだ瞬間、甘酸っぱいものが口に広がる。最初は意外な味に口が止まったがまた噛み始めるとまた甘酸っぱい味が口の中に広がった。この味、もしかして…。

柚はチラリと彼を見ると彼は自分を見ていた。それが非常に恥ずかしくてまた前を向きかけたが彼は目が合うなり少し微笑んで柚が持っていたパンを指さして言った。

「これ、柚が入ってるパンらしい。珍しいだろ？」

「うん！！柚のパンなんて食べたの初めて！！」

何故か感動して一口、もう一口と夢中で食べている柚を横目に彼は「それはよかった」とニコリと笑って横にあったペットボトルのお茶を一口飲む。

「でも…本当に食べても良かったの？」

パンを食べ終わった後二人は何もせずただその場に座っていた。特に会話はなくても空気が悪くならなくていつそのままでもいいかなと思っただがパンのお礼もしなくてはいけなかったので思い切つて口を開いた。そんな柚に彼は不思議な顔をして柚を見る。

「柚のパン、なんだか本当に珍しそうだったから」

「ああ、」

納得したように彼は相槌をして微笑む。

「いいの、むしろ君に食べてもらいたいと思っただし」

「え…どういふこと…？」

そう問いかけると得意げな顔で柚を見て指差す。急に指を差された

柚はどうしたらいいのかわからずにただ彼を見ていると

「倉本柚」

彼の口からそう発せられた言葉に柚は目を見開いた。

席は隣でも今日初めて話した人なのに名前を覚えてくれているなんて思いもしなかった。彼は人気があるし、あまり学校にこないから私の名前どころか存在さえ覚えてないと思っていたのに…何だか不意打ちだ。

驚きのあまり「何で…？」と漏らすと彼は苦笑いをし、「隣の席の人くらいは覚えるよ」なんて言っ

(…何か卑怯だ)

体の奥が熱くなるような感覚に陥った。胸の奥が何だか痛い。そう、初めて恋に落ちたのだ。

片時も離れないあの感覚（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

相思花の狂い咲き

「お、おはよう！！江戸川君」
「ん…はよ」

屋上の出来事から一週間が経ち、多少の緊張はあるが彼と少しずつ話せるようになった。その急な発展に智慧達は目を丸くしたが柚の勇気を見て今では微笑ましく見ている。

柚は「よしっ」と心の中でガッツポーズをして息を整えると自分の席に座って教科書を机の中に入れていく。彼はというと柚と挨拶を交わすとすぐに机にうつ伏せになり寝る体制へと戻っていた。多分本当に朝が苦手なのだろう。これもいつもの日常になってきている。そんな彼をみて微笑み鞆を机の横にかけると智慧がいる席に向かった。

「おはよー！智慧」

「おはよう。それにしても…本当に良かったね。江戸川君と仲良くなれて」

「へ？」

智慧の言葉に柚は少し赤くなりながら瞬きをして智慧を見ると彼女はニヤニヤとからかうような微笑みをして柚の肩をパンパンと叩く。「そ、そんな…仲良くだなんて…偶然会っただけで」

「でも毎朝話しかけてるでしょ？もう恋人同士みたいに…ね！」

「こ、恋人…！？」

見る見るうちに赤くなり始めている柚に智慧は「ハハハ」と笑い次は頭を優しく叩く。

「柚は本当に純粹だねえ」

「…からかわないですよ」

「ごめんごめん…でもね」

頭を叩いていた手が次第に優しく撫でる変化に不思議に思い、智慧

を見る。智慧は袖を見ていてニコリと笑った。

「私は嬉しいの。まあ相手はすごくモテる男の子だけどね…袖に好きな人が出来たって思うと」

「智慧…」

「でもいくら相手がモテるからって諦めちゃだめよ。袖だってまだ可能性が残っているのだから」

「…って私まだ江戸川君が好きって確信したわけじゃ…」

「なーに言ってるの。もう袖は江戸川君のこと好きなのよ。顔を見れば分かるわよ」

正面を向いて頬を抓られる。本当に智慧はスキンシップの絶えない人だ。

呆れるように智慧をみて口を開けようとした瞬間、HRのチャイムが鳴った。

「ほら、早く席に着きな」

「あ、うん…」

智慧に背中を押されて渋々と自分の席に戻る。

席に座るとまだ彼はうつ伏せに寝ていた。毎度のことだから担任も諦めていて何もないかのように今日の連絡事項を伝えていく。

ふいに彼を横目で見て息を吐いた。

(いつも気持ちよさそうに寝ている…)

メガネの奥の閉じられている目。何度も見てきたがやっぱりドキドキは収まらなかった。

胸の奥が締め付けられるような感じが毎度のように起こるこの現象はやっぱり智慧の言った通り恋というもののなか。

確かにドラマや漫画など女の子が男の子に恋する瞬間はいつもこのような表現になっているが…転校ばかりしていたので一度も恋をしたことのない袖にとって何か疑いがあった。

誰にも気づかれないうちに胸に手を当てて目を閉じる。やっぱり治まらない過剰すぎる心臓の動き。

(…病気なのかな?)

目を開いて自分の胸を触っていた手を見る。若干熱いような気がした。

そして再び彼を見て小さく欠伸をした。

「あ、ごめん。先に帰ってて」

放課後の時間になり廊下を歩いていたらとき、柚は急に立ち止まって鞆をゴソゴソと探り始めた。

「忘れ物？」

「うん、携帯忘れたみたい」

「一緒に行こうか？」

「ううん、いいよ。取りに行くだけだからすぐに追いつく」

「分かった。それじゃ下駄箱のところまで待つてるね」

智慧にごめんと詫びを入れて早足で教室に向かう。確か先ほど智慧にメールを送った後に机の中に入れたような気がする。着信とかなければいいのだが…と不安になりながら自分の教室へ向かった。

少し走ったため教室に着くころには息が荒くなっていた。教室のドアの前で息を整えてからドアに手をかけたとき

（あれ？）

教室の前で人影を見た。恐る恐る開けるとそこには彼の姿。机にうつ伏せになっているということはまだ寝ているのだろう。

（本当によく寝る人だなあ）

半ば呆れて彼を見るけどまだ起きる気配はない。

先に自分の机の中から携帯を取り出して鞆の中に入れるとまだ寝息の立っている彼を仕方ないと思っただけで起こしはじめた。

「ねえ…江戸川君。もう放課後だよ」

「…うん」

お、もしかしてすぐに起きてくれるか。智慧も待たせているのでできればすぐに起きてほしい。と願いも込めてさらに強く彼の肩を揺

さぶる。

彼は少し動いてまだ少し目を開いた。

(あ、起きた)

あと少しで完全に起きるだろうと声を出そうとしたとき彼に強く腕をつかまれる。

「え、江戸川…君？」

あまりにも突然で反射的に後ろに下がったが、なかなか腕を話してくれない。朦朧とした目で袖を見ている。そんな彼の姿に袖は心臓が破裂しそうで慌てて彼の名前を呼ぼうとしたが

「……灰…原」

彼の口から出た名前に一瞬固まった。

「探したんだぜ…お前のこと…」

(誰…？灰原って)

袖は彼をじつと見る。とても怖くなった。それは彼に対してなのか、その『灰原』という人に対してなのか分からない。

「江戸川君！」

袖が叫んだ瞬間、彼の朦朧としていた目が色を映した。

「…倉本？」

彼は今の状況を理解できていないだろう。何故袖がここにいるのか、そして何故袖の腕をつかんでいるのかも。しかし袖の怖がっている目を見て咄嗟に握む手を放した。

「ごめん」

それだけを言い残して彼は教室から出ていった。

取り残された袖は震えが止まらなかった。一体彼の過去に何があったのか、そして灰原とはいったい誰なのか。

袖は彼が出て行ったドアを見る。

もう彼の姿はなかった。

相思花の狂い咲き（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

ちよつとスランプ

たどたどしく、笑う

あれから袖は彼のことと『灰原』という人のことで頭がいっぱいになっていた。

『灰原』なんて珍しい苗字の人、クラス…否、学校の中にいない。転校したばかりなのでまだ知らないだけかと思って智慧に聞いてみたがそのような人、聞いたことがないと言われた。

それじゃ一体『灰原』とは誰なのだろうか。男？女？年齢は？性格は？考え始めるときりがなくらい疑問が浮かび上がりいい加減脳がパンクしそうだ。

「あー！！」

袖はやりきれない思いになって自分のベッドにダイブする。

もしかして灰原っていう子はそれはそれはもの凄く可愛い女の子で彼はその子に凄くゾッコンで…もしかしたら付き合っていたりして

(…なんかものすごくへこむ)

近くにある抱き枕に思いきり抱きしめて顔を枕に埋める。

まだ誰かも知らない『灰原』に嫉妬して落ち込んで…こんなになるくらい彼のが好きなのかと袖は盛大にため息を吐いた。

(明日学校行き辛いな)

智慧にも彼について伝えた方がいいし…否、でも『灰原さん？』のことはまだ伝えない方がいいかも…彼のプライベートにもなるし。

「やっぱり好きなんだあ…」

彼と出会って1か月ちょっと、初めて話してから1週間ちょっと。まだ間もないというのに彼への気持ちは次第に大きくなるばかり。

(気持ちは伝えた方がいいよね)

言わなくちゃ後悔するってよく言うし。と袖は抱きしめていた枕を離して仰向けに寝転がる。

(でもその前に灰原さん…のことを知らなくちゃ)

よしつと決意をして目を閉じる。そしていつの間にか夢の中に落ちていた。

そして朝。

柚は教室のドアの前で立ち止まる。

（江戸川君には普通に挨拶して…『灰原さん』のことは……やつぱり触れない方がいいよね）

心の中で何度もつぶやいてドアに手をかけるがやはり心の準備がでない。喧嘩したわけでも避けられているわけでもないのに何かの緊張がいつもより多く柚の中に襲ってくる。

もう一度深呼吸をして再度ドアに手をかけた。

「…さつきからなにやってんの？」

ふいに後ろから聞き覚えのある声が聞こえて大きく肩を震わす。「ひい」と零してしまった口を両手で押さえて後ろを振り返る。そこにはやつぱり噂の彼がいて柚は無意識に後ろに下がるがドアは閉めた状態だったので思いきり後頭部にぶつけてしまった。

「いったー!!」

咄嗟にしゃがみこんで口を押えていた手が頭にいつてぶつけてしまった場所をおさえると彼は苦笑いをしつつ手を差し出した。

「大丈夫か？」

「あ、はい…」

そつと彼の手を握ると予想以上に大きいその手に胸が鳴った。軽く手を引つ張られて難なく立ちあがることができた。

「あまりよそ見するんじゃないぞ」

その一言だけを残して彼は教室に入る。

柚はまだ彼の手の感触を忘れずにいた。あの大きくて男の人特有のゴツゴツした手。そして彼が見せた少しの笑顔。

（やつぱり好きなんだ）

彼に触れた手をそつと反対の手で触れる。

先ほどの出来事を思い出して微笑むがそれと同時に昨日の出来事も思い出す。

彼は何にも気にしていないように見えた。やっぱり気にしているのは自分だけなのかなと思ってしまうと何だかさびしい気持ちになった。

だけど柚はまだ知らない。今後その『灰原』と言う人と大きく関わるようになることを…。

たどたどしく、笑う（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

かわいいおんなのこ

それはまだ幼かった頃、絵本が大好きだった私は毎日のように絵本を読んでいた。有名な絵本にシリーズものの絵本。ちよつとマニアックな絵本も飽きずにずっと読んでいたような気がする。そして成長していくうちに読み物は絵本から本に代わり、それでも時間を経つのも忘れてずっと読んでいた。

そして今、そのたくさん読んでいた本の中である一文をふと思い出していた。

『人生は平凡で陳腐だ』

その言葉は周りから見るとただの小説の一部分でしかない。私も何も気にせずに読み流していた。：ような気がする。正直あまり袖自身も覚えていないのだからこれは仮定にすぎないのだが。しかし何故今この一文を思い出したのだろうか。

(平凡で陳腐：か)

現代文の教科書を片手に袖はその言葉を何度も頭の中で繰り返す。授業もなかなか頭に入らない状態でノートも白紙のまま。もうすぐ期末テストがあるというのにこのままでは赤点決定だ。

隣の彼はやはり欠席のようで空席が続いていた。多分最初に袖と彼が話した場所にいるのだろう。

何もしなくても満点をとれる彼は本当にすごい人で学校に来ている意味がたまに分からなくなる。まあ既に半分学校に行っていない状態になっているのだが、本当出席日数が足りるのか心配だ。

彼は中学時代もこのように休んでいる日数が多かったと前に彼と同じ学校だった人に聞いた。その時は義務教育だったおかげでなんとか卒業できたが、高校に行ったら留年、最悪では退学するのではないかと言われていたほど問題児だったらしい。袖は風紀委員でもクラス委員でもないが変に心配してしまう。多分彼にとつたらそんな

の迷惑だけだと思うが。
そう思つて授業終了10分前にやっとシャープペンシルを右手に持ちスラスラとノートに板書し始めた。

そして放課後になり、ぞろぞろとみんなが帰っていく。彼はいつの間にかいなくなっていた。きつと早退したのだらう。

「あ、ごめん。私ちよつと用があるから先に帰つて」

柚は友達に詫びを入れて下駄箱の反対側にある図書室に向かう。

授業中に思い出したように出てきた一文がどうにも気になって仕方がなかった。転校の繰り返しだったので家にはもう本はないだらう。でも案外有名な小説だったような気がするので多分図書室に置いてあるかもしれない。柚はあまり幼い時はマニアックな絵本ばかり読んでいたが大人になるにつれて有名な本ばかり買ってもらっていたから。

そして図書室に着き、本棚に並んでいる本を指でなぞりながら探していく。確かタイトルは…

「あれ…なんだつたつけ？」

指を止めてふと思つた。

何年か前に読んだ小説。もう忘れても無理はないほど時が流れていた。

確かそれを読んだのは中学生くらいだったかな。結構難しそうな本だったことは覚えている。でも何でそんな難しそうな本が家にあつたのだらう。

「…あれ？」

なんだか薄らと見えている昔の記憶。

誰かの面影だけが浮かび上がっていた。でもそれ以上は思い出せない。

(なんだらう…何か忘れてる)

それは大事なことではないことだとは分かっているつもりもない気持ちに気持ち悪さを感じていた。でもこんなところで頭を悩まして疲れるだけだと思って袖は本探しを諦めて図書室を出た。

時刻は午後5時をさしていた。生徒はほとんど帰ってしまっていて校庭には数人しかいない。まだ外は明るいがもうすぐ西日を照って辺りは暗くなるだろう。夕日が沈み始めたら一瞬なのだから。まあもうすぐ夏になるのでその心配はないが。

袖はできるだけ早足で校庭を歩いて校門をくぐる。

「すみません!!!」

校門を出て数歩歩いたところで不意に後ろからかけられた声に袖は振り向く。そこには見覚えのない可愛い女の子が一人立っていた。

一瞬呼ばれたのは自分ではないと思ったが、振り向いたとき女の子は嬉しそうな顔をして袖がいる場所に向かって走ってきた。

なんというか…不審だ。

「あの…どうしました?」

心の中で少し身構えて女の子に話しかけると女の子は「急にすみません…」と苦笑いをする。

「あの、コナン君ってまだいますか?」

「コナン君?」

「そう、江戸川コナン君」

急に彼の名前が出てきて目を丸くした。女の子は帝丹高校の制服を着ていて明らかに他校の生徒だ。それなのに彼のことを知っているなんて。

でも彼は噂では他校の生徒にも告白されていると言われているのでそんなに不自然ではないと思ったが実際起こってみるとなんだか複雑な気分だ。

その気持ちが態度に出てしまったのか袖は少し無愛想な顔をして目

の前にいる女の子に話す。

「…江戸川君なら早退しました」

「え！？早退？」

「はい、同じクラスなんですけどHRの時にはもういなかったの
で早退かあ…またコナン君ったら授業途中で抜け出しちゃって！
女の子の言葉や態度に柚は疑問に思った。なんというか前から知っ
ているような…否、何だか親しいような言い方だった。

その時に前に彼が発した言葉が頭によぎる。

「…もしかして…灰原、さん…ですか？」

「へ？」

柚が恐る恐る聞いた一言に女の子は大きく目を開く。少しだけ間が
あいて人間違いだど気付いた柚は「ごめんなさい、何でもありません
」と恥ずかしくなりながら帰り道を歩こうとしたとき、急に腕を
掴まれた。

少し驚き振り向くと先ほどの女の子が自分以上に驚いた表情を見せ
てこっちを見ている。

「あの…」

何か危険な感じがして焦りながらも声をかけると女の子ははつきり
とした声でこういった。

「何で哀ちゃんのこと知ってるの？」

「…哀ちゃん？」

「そう、灰原哀ちゃん…4年前にいなくなったの」

「……え」

柚は何か渡つてはいけない橋を渡ってしまったような気分になった。

かわいいおんなのこ(後書き)

タイトル提供 確かに恋だった

たまにコナン小説読んでいますが灰原さんの失踪話？がいくつかありますね(^^)他の方とかぶっちゃってたら申し訳ありません…でも皆様凄く良い小説をお書きになるので何だか尊敬です

知っていたの、ほんとうは。

(どうしてこんなことになったのだろう)

柚は真っ先にそう思った。

近くの小さなカフェテラス。テーブルの上にはコーヒーとレモンティーが一つずつ。

そして向かい合つのは先ほどあつた女の子。名前は吉田歩美と言うらしい。

「ごめんね、初対面なのに一緒にお茶しようなんて言って」

「あ…大丈夫。用とかなかったから」

苦笑いまじりで言う「良かった」と言ってニコリと微笑む歩美に柚もつられてまた無理やり微笑む。しかしコーヒーを持つ手の震えは尋常ではないと自分でも感じた。

「でも柚ちゃんの口から哀ちゃんの名前が出てきたときは本当にびっくりした!!!まさかコナン君が寝ぼけて柚ちゃんと哀ちゃんを間違えるなんてね」

コナン君らしくないねと歩美はクスクス笑って目の前のレモンティーを飲む。

歩美は人懐っこい性格なのだろう。たとえ初対面でもこんな風に明るく話せて柚のことをすぐに『柚ちゃん』と呼ぶほどだ。周りから見ると友達と話しているのと変わらないのだろう。誰も今日初めて会ったなんて思ってもいなさそうだ。きっと歩美のいいところはそんなところだろう。なんとという羨ましい性格だ。

「なんかごめんね…急に灰原さんなんて呼んで」

「ううん、でもやっぱり気になっちゃうよね。違う人の名前呼ばれたら」

私もね…何回かあるんだ。と思い出すように目を細める歩美に柚は首を傾げる。

「哀ちゃんに間違われたこと」

「…そうなんだ」

「そのときはいつもコナン君が寝ているの。そして起こしたら真っ先に『灰原』っていうんだよ。失礼しちゃうよね」

眉毛を八の字にしている歩美に柚は何かを感じた。

きつと歩美は彼のことが好きなのだろう。否、もしくは好きだったのかもしれない。

(叶わない恋なんだね…お互いに)

冷め切ったコーヒーを口に含むとちよつとだけ苦かった。そういえば私って甘党だったっけ？なんて思ったが冷め切ったコーヒーに今更砂糖をかけても溶けにくいので我慢してそのままもう一口飲む。

そして勇気を振り絞って柚が一番知っておきたいことを歩美に言い放った。

「あの…もしかして、江戸川君と灰原さんって…付き合っているとか…」

「…多分付き合っていないと思うよ」

「え…多分？」

柚はまた首を傾げると歩美はそれに気が付き「そっか…」と小さく言った。

「うん、だってあの二人あまり自分のこと話さないから」

「…そう、なんだ」

確かに初めて話した時も、あの放課後の後も彼は一度も自分のことを言わなかったと思う。柚自身もあまり気に留めていなかったのだからないが。

(まあ私も江戸川君に自分のことをあまり話さなかったけど…)

その後歩美は店員を呼んでレモンティーのおかわりを頼む。ついでに柚も冷め切ったコーヒーのおかわりを頼むことにした。

そしてすぐに来た新しいレモンティーに砂糖を一杯だけ入れてスプーンでかき混ぜながら歩美は言った。

「…でもコナン君は哀ちゃんのこと好きだと思っ」

その顔はとても切なそうな顔で柚は歩美の顔をじつと見た。
歩美は鞆の中から携帯電話を取り出してボタンを押し続ける。そして柚にある画像を見せてきた。

「四年前の写真だけど、前の右から二番目の人…これが哀ちゃんだよ」

携帯画像のなかに入っていたのは五人の子供も一人の老人が仲良く映っている写真。真ん中に映っている人は彼だとすぐに分かった。

その隣にいた赤みかかった茶髪の女の子。この人が『灰原哀』
その姿は小学六年生とは思えないほど綺麗な人だった。

「すごく綺麗な人でしょ？」

「うん…」

「へへっ…自慢の友達なんだ」

ニコニコしながら頬杖をうち、まるで自分のことのように言ってきた歩美に柚は複雑な心境であった。

「でもコナン君は言うの…もう哀ちゃんは二度と帰ってこないって…帰ってこない？」

その言葉に目を丸くする。

「うん。でも…一番哀ちゃんを求めているのはコナン君だと思うのその言葉だけが頭に残って仕方なかった。

その後歩美と別れた後、柚はほんの少しだけ泣いた。

彼の好きな人を知ってしまったからではない、自分は叶わない恋をしてしまったからではない。

泣いた理由が柚自身も分からなかった。

知っていたの、ほんとうは。(後書き)

タイトル提供 確かに恋だった

ためらいなく触れる手

あれから数日、柚は歩美と会っていない。そして彼とも話す回数が少なくなってきた。それは柚が意識しているからか、それとも彼に柚が『灰原さん』の存在を知っているとバレてしまったのか。

別に柚自身隠すつもりではなかったが彼に直接話そうとも思わなかった。もちろん親友の智慧にも簡単には話したが行方不明のことは言わなかった。なんとなく智慧や他の人に話したら厄介なことになると思ったから。

「で？どんな人だったの？その灰原さんって人は」

「…」

「まあ言いたくないのなら言わなくてもいいけどね…」

「…そんなことはないけど」

その時の柚は誰でもわかるくらいテンションが低かった。『その時』ではなく数日前、歩美と出会ってからだといった方が正しいだろうか。ずっと机に頬をつけて彼の机ばかり見ている。そしてたまにため息なんて吐きながら。

そんな調子の柚に智慧は何も言わなかったがそれが数日間だ。今日ついに痺れを切らし思い切って柚に問いかける。

「一体どうしたっていうのよ。もうずっとこの調子じゃん」

「…なんでもないんだけど…」

「じゃあテンション上げてよー。それともその灰原さんに何か言われたの？」

「…正直に言うとも私も灰原さんに会ってないの」

「はあ！？でも前に灰原さんを見たって…」

「…灰原さんの友達の携帯画像で」

「…ああ、そういうこと」

智慧は呆れて柚の前の席に座り柚の机に頬杖をつきながら「そうい

うことは早めにいいなよ」と言った。

「で？その灰原さんの顔を見て感想は？」

「…すごく美人だった」

「それだけ？」

「あとクールっぽい」

「……意外に簡単だね」

苦笑いを一つ落とした智慧にため息を吐く。

自分も何故こんなにテンションが低いのか分からない。出来るものなら一日も早く元気になりたいけど智慧には悪いが努力する気力さえなかった。

「ま、まあまだ失恋したわけじゃないからさ！！元気だしなよ」

「うん…」

元気が出ないのは失恋したからではない。とはいっても彼のことを諦めたわけではないけどなんとなく…そう、なんとなくだけと彼と『灰原さん』の関係というか、間のトラブルというか…そんなことを無意識に考えている自分がいた。でもそれは自分には関係のないこと。踏み込んではいけない。

「…ねえ智慧」

「何？」

「私ね…灰原さんの顔を見て思ったの。四年前の画像なんだけど。

この子、江戸川君のこと好きだったんだろうなって」

「…柚」

「まあ女の勘だけどね」

でも女の勘はよく当たると誰かがいう。しかし本当に当たっていてもどうしようもないか！！と柚は起き上がり空を見た。

そして次の日の休み。柚は気晴らしに一人で遠出することにした。目的地はないが何も考えないたくなかったので自然のあるところに

行こうと思った。ゆらゆらと電車に揺られて気づけば終点駅で乗客はみんなホームに降りていた。

出来れば自然のあるところに行きたかったのだがホームに降りると自分の最寄り駅よりも大きな駅で周りには建物だらけ。そこは完璧な都会。柚は降りてから間違っただけだと思い、知らない街に襲い掛かる不安を目の当たりにした。

(やっぱり電車なんか乗るんじゃないかな)

ひったくりとかチンピラに会ったらどうしようと心配しながら警戒もしつつ歩いていると男の人の肩にぶつかり柚は勢いよく倒れてしまった。

「おい！！気をつけろ、ガキが！！」

「す…すみません」

涙目になりながら謝る。男の人は少し舌打ちをして駅の改札口へと消えて行った。

ぶつかった拍子に鞆の中にあつたものが散らばったまま。周りの人は助けようともせず「可哀そうに」などひそひそと言っているだけだった。

そして柚はまだ男の人が消えて行った改札口を見ていた。

(水色のワイヤツに青みかかった紺のスボンに黒のベスト…確か有名な校の)

そう、あの制服は結構有名な高校だった。智慧も憧れていると言っていたがその高校の生徒がとても怖い人だなんて。柚は少し肩を震わした。

すると周りの声とともに足音が聞こえる。こちらに近寄ってくるようだ。柚は振り向けず心臓が激しく動く。

「あなた大丈夫？」

そして後ろから女の人の声が聞こえて横から赤みかかった茶色の髪と先ほど見た水色のワイシャツが目に入る。

「本当に困った人がいるものね。ぶつかったのにゴメンの一言も言えないなんて」

そういつて女の人は散らばっている袖のものを拾い上げる。

「あ…すいませ…ん」

そっぴいなから女の人を見ると袖は大きく目を開く。開いた口が塞がらないとはこのような状況のことを言うのだろうか。

…初対面だがあの人だ。袖は確信を持っていた。

固まった状態のまま女の人を見続ける。そしてすべて拾い終わったのか「はい」と鞆を差し出す女の人に対して「ありがとうございます」という前にこう言ってしまった。

「…灰原哀さん…ですよね？」

そっぴいつた瞬間、彼女は驚いた顔で袖を見た。

ためらいなく触れる手（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

手の届かない領域

彼女は何故自分のことを知っているのか言わなかった。それはまるで何もかも分かったようで少し怖くなった。全てを見透かされているような目でこっちを見ていたような気がしたが袖は決して引こうとはせずに先ほどのお礼を言葉に無理やり彼女を目の前にあった喫茶店に誘った。

とはいっても話すことはなく二人の間に沈黙が長く続く。

話したいことはいっぱいある。というか聞きたいことがいっぱいある。彼女自身のことと彼のこと。あとは二人の間になにがあったのか。しかしそれは彼と彼女のプライバシーに関わることだと思った。袖は何も言えずに目の前にあるコーヒーを何回もかき混ぜることしかできない。

今になって後悔した。チラリと彼女を見ると涼しげな表情でブラックコーヒーを口につける。その表情がより袖を緊張させた。

カタリと彼女がコーヒーカップを置く音と同時に肩を震わした。そんな袖に呆れたのかため息を吐いて彼女は口を開いた。

「本当は何がしたいの？」

「え？」

「私を喫茶店に誘って。何も無いとは思えないけど」

「あ…えつと」

不意に本心を突かれて内心凄く焦るが平常心を見せるようにする。

しかし彼女はそんな袖もお見通しのようで目を細くして怪しむように見た。そんな目で見られて袖は額から冷や汗が出そうな気持ちだ。
(…どうしよう)

確かに今日彼女に会うなんて思いもよらなかつた。もしかしたらこのまま一生会わないとも思っていたのだから。会っても他人のふり…実際には他人だけど、彼女の顔を知らない人のふりをして「ありがとう」を一言に別れることも可能だったが先ほど何故かそれがで

きない自分がいたのだ。

そしてまた長い沈黙が続き耐え切れないように席を立つ彼女に咄嗟に口を開いた。

「江戸川君！！！」

その一言で彼女はピクリと肩を震わす。袖も何故彼の名前が出てきたのか分からないが口はそんな思考を無視して動き始める。

「…江戸川君が会いたがっています……と私は思います」
遂に言ってしまった。と思った。

目が泳いでいるのは自分でも分かる。もう彼女と目を合わせられない状態だった。けど彼女の目線が痛いほどこっちに向いていることは分かる。

彼女は一度立ち上がった席をもう一度座り直し、目を伏せたままこ
う言った。

「あなた、江戸川君と同じ高校なの？」

その声には怒りというものがなく恐る恐る彼女をみるとやはり怒っている表情ではなかった。

「あ…はい、江戸川君と同じクラスの倉本袖と言います」

「そう…」

「あの、すいません。急にこんなこと言って」

「いいのよ。慣れてるから」

「へ？」

「いえ…こっちの話」

彼女は伏せていた目を開いて袖を見る。少しピクリと反応するが彼女の瞳に自分が写っていると思っただけ嬉しくなった。

彼女はやはり見た目通りの性格をしていた。なんというか何事にも冷静だ。これがクールビューティーというのだろう。こんな人を彼は好きなのかを思うと自分はかなり遠い位置にいるのか…ちよつぴりへこんだ。

「…で？江戸川君がどうしたって？」

「え？あの…多分会いたがってると思います」

「ふーん…それで？私が彼に会いに行けと？」

「いや、あ、えっと…そうしたら喜ぶかな？って…」

怒ってないのは分かるが何だか怖い。柚が今思っていることだ。大体こういう行動はおせっかいだということは分かっているがそうしなくちゃいけないような気がした。

だけど彼女の言った言葉は意外な言葉だった。

「…喜ばないわよ」

「え？」

もしかしたら聞き間違いだろうか。

柚は聞き返したが次に返ってきた言葉は違った。

「あなたって江戸川君のこと好きなの？」

「え…ええ!？」

急な質問に大きな声を出してしまい、周りは一斉にこっちを向く。

それが恥ずかしくなり身を潜めるように背中を丸くする。彼女はクスクスと笑って「やっぱりね」と呟いた。

「あ…でももう付き合えるか思っていないので安心してください」

「何で？あなたにも希望はあるかもしれないのよ？」

「だって灰原さんと江戸川君って…両想いなんじゃ…」

「そんなことあるはずないじゃない」

彼女は冷めたコーヒーを飲んで柚を見る。

「少なくとも彼は私のことは嫌ってるわ」

柚は顔をしかめる。おかしい。そんな言葉が頭の中を巡らせる。

そして柚が混乱している途中、彼女はこんなことを言った。

「でも本当にあなたも希望はあるわよ。だって彼…黒くて長い髪の子が好きなのだから」

その瞬間、柚の中で何かが壊れる音がした。

なんでそんなことを言うの？

一番にそんな言葉が頭の中に流れる。希望はないなんて自分が一番分かっているのに。だって彼の必死になって彼女の名を呼んでいる姿を見て一目瞭然だ。あの寂しそうな顔もきつと彼女のことを考え

ているに違いない。それなのに…

我に返るときには袖は喫茶店から出て行っていた。無我夢中で走り出す自分がまるで逃げている人みたいで嫌だったがそれ以上に彼女のあの言葉が頭に残って嫌気がさした。

手の届かない領域（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

差出人の名前はない

(この町も四年ぶりね)

米花駅の改札口でそう思っているのは赤みかかった茶髪の少女。灰原哀だ。

彼女は四年前お世話になった人の家に出て行ったきり一度もこの町に訪れなかった。

それなのに今更になってこの町に来た理由は一つ。昨日突然会った袖という女の子が忘れていった手帳を届けるため。

とはいっても袖の家を知らない哀は仕方なしにコナンの家…の隣の阿笠博士の家に行くことにした。

博士に頼んでコナンに渡してもらおう。もちろん届けた自分の名前は伏せてもらって。

そう考えているうちにいつの間にか博士の家の前に着いてしまった。ベルを鳴らそうとするがなかなか勇気が持てない。自分が勝手に出て行って初めて博士に会うのだからもしかしたら怒って出てくれないかもしれない。そんな恐怖が湧き上がりベルを押そうとする手も震えが止まらなかった。

(バカね…勝手に出て行った人間がなんでそんなに恐れているの) 『もしかしたら』ではなく『きっと』なのに。もうこんな自分なんて忘れてしまっているかもしれない。

(この子の手帳は同じ学校の生徒にでも渡しておこう) 学校の近くを歩いてると一人くらいは彼女と同じ学校の人に会うだろう。

冷静になってみれば自分が周りのみんなに拒絶されることくらい普通はだと考え始めた哀は諦めたようにベルを押そうとした手を下ろして来た道を戻ろうとしたとき、後ろから何かが落ちる音が聞こえ

た。

振り返るとそこには昔より少しだけ老けたが相変わらず優しい顔を
している哀の大切な人の姿。

「…哀…君？」

それは紛れもない博士の姿だった。

「ほれ、コーヒーじゃよ」

「…ありがとう」

あのあと哀は博士にいったい叱られた。

とても優しい博士があんなに怒るなんて…哀は驚いたがその後、優
しく抱きしめてくれて少しだけ涙が出そうになった。

きつとあれは四年分心配させた罰なのだろう。

そう思つて哀は小さく「ごめんなさい」と呟いた。

それから少しだけソファで寛いでいると博士がコーヒーを出してく
れた。4年ぶりの博士のコーヒーは少しだけ苦くて懐かしい味だっ
た。

そして反対側のソファに博士は座るといつもの優しい顔で哀に言う。

「それで？哀君はワシになんの用なんじゃ？」

四年ぶりに訪れたのだから何か理由があるのじゃろ？と言つてきた
博士にちよつとだけ安心した哀は鞆の中から先ほどの手帳を出す。

「これ、彼の同じ高校に通つてる倉本柚さんって人の手帳なの…彼
にお願いして彼女に渡してくれない？その時できれば私の名前を伏
せてほしいの」

博士は丸くして手帳を見た後に哀を見る。しかしすぐに元の顔に戻
り「分かった」と一言だけ言った。その言葉に次は哀が目を見つめ
る。

「ん？どうしたんじゃ？」

「…それだけなの？」

哀の言葉に首を傾げる。

「何で私がここを勝手に出て行ったかとか聞かないの？」

まさか本人が言うとは思わなかったので博士は驚いた。多分それは一番触れてほしくないことだろう。だからあえて言わなかったが…しかし哀の顔は今、不安でいっぱい顔になっていた。

博士は軽く目を伏せてそして笑った。

「哀君が話せるようになって聞いたら聞くとよ」

そういつて博士は哀の頭を撫でる。

久しぶりに哀の心は穏やかになったような気がした。

そして長居してしまつたため急いで帰る哀に博士はこう言う。

「哀君も聞きたいことがあるんじゃないかね？」

唐突だつたので驚いたが哀は「いいえ」と言い残して阿笠家を出て行った。

否、本当は聞きたいことが一つだけあった。けど今は聞かない方がいいのかもと思ったのだ。

そして哀は携帯電話を取り出した。

「ただいま。博士？」

自分の家ではないのに必ずと言っていいほど博士の家に来てしまうコナン。今日も同じように阿笠家にお邪魔するが人の姿がない。

(…また変な発明でもしてんのか)

そう思つて博士がこの部屋を訪れるまでゆっくりしようとソファに座ろうとしたとき、テーブルの上にあった二つのコーヒークップに目が行く。そしてすぐそばには女の子らしい手帳が置かれていた。

(…歩美でもきてたのか?)

少々抵抗はあったがその日記帳に手を触れようと思ったとき、後ろからドアが開かれる音がした。

「おお、新一。帰っておったのか」

博士がハンカチで手を拭きながらコナンのもとへ近づいてくる。

「ただいま博士。さつきまで先客がいたのか？」

「ああそうじゃ、先ほど頼まれごとをしてのう…新一、これをお前の同じクラスの倉本さんという子に渡してほしいのじゃ」

そういつて先ほどコナンが触れようと思っていた手帳を持ってコナンに差し出す。コナンは不審に思って博士を見ると何だか少しだけ動揺しているような気がした。

「…誰から頼まれたんだ？」

コナンの言葉に博士の目が泳ぐ。そして「えーと」などと言って誤魔化す仕草を見てもしかしてと小さな可能性を探り当てた。

「…もしかして、灰原か？」

博士の目が驚きが変わった。

コナンは確信した。先ほど来た先客は四年間探していた彼女だ。

その瞬間、追いかけるようにコナンは阿笠家を出て行った。

何分前に出て行ったのかは分からないがもしかしたら間に合うかもしれない。向かうは米花駅。彼女はきつとその電車に乗るはずだ。間に合えと頭の中で何度も唱えて走り続ける。

そして目的地の米花駅に着いたとき、誰かの車に乗ろうとしていた赤みかかった茶髪の少女に目が留まった。

「灰原！！！！」

大声でそう叫ぶと、一瞬だけ彼女と目が合う。

しかし彼女の乗った車は動き出して大通りへと消えて行った。

コナンは放心状態になりその場を立ち尽くす。

四年間探してやっと見つけた彼女。

その姿はとても綺麗だった。

差出人の名前はない（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

スランプが消えませぬ

足りない言葉

嫌な予感はした。

一昨日に彼女に会ってから無意識に喫茶店から出て行って鞆の中を見たとき、持ってきていたはずの手帳の姿が見えなかったからまさかとは思った。

もしかしたらぶつかったときに落としてそのまま忘れてきたのかも思ったがあんな大きいもの見落とすわけではない。リップクリムもちゃんと鞆の中に入っていたのに。

そして袖の嫌な予感は確信へと変わりつつあった。

今まで一回も袖を呼び止めたことがない彼が血相を変えたように呼び止めたのだ。

別に隠すつもりはなかったがなんとなく問い詰めて欲しくなかった。否そもそもこんなことした自分に非があるのだが。そして彼のその表情は明らかに怒っているような気がして逃げ出したかった。でもそんな事をしたらきつと彼は幻滅するだろう。好きな人にそんな風に思っただけでなく袖は彼の後ろを付いていく。

そして人気のあまりない校舎裏で彼は立ち止まり、少し沈黙が走る。彼は少し眉を寄せて口を開いた。

「…これ」

そう言っただけで彼が差し出したものはやはり一昨日忘れていった手帳だった。きつと彼女がわざわざ彼の家に行ったのだろう。彼が彼女に会ったのかは定かだが。

袖はあまり彼の目を合わせずに「ありがとう」と一言だけ言い手帳を受け取る。

「…それじゃ私先生に呼ばれているから」

早くこの場から去りたかったため適当に理由を付けてきた道を戻ろうとするが、彼の手によってそれを阻まれる。彼に握られた腕が痛い。

「江戸川君、離して」

「嫌だ」

「先生に呼ばれているの」

「そんなの逃げる口実だろ？」

「…ちがつ」

「なあ、今あいつはどこにいるんだ？」

やっぱりと袖は思った。

やはり彼は彼女に会っていない。彼女が彼に会う前に彼の親か知り合いに頼んだのだろう。それを頭がよくキレル彼が察知して今の状態だ。

別に彼女には自分があの場所にいることを誰にも言っではいけないなんて言われていない。

「…教えない」

でも口が勝手にそう動いた。

微かに彼の眉が動いて袖は少し肩を震わすが口を固く閉ざして何も言わない。

「何で？」

いつもより低い声で彼は言う。

「江戸川君にはどうしても教えられないの」

「…どういうことだ」

「灰原さんがそう思っていそうだったから拳を握って彼を見つめる。

彼は目を見開いて眉間を寄せる。

「お前が灰原の何が分かるんだよ！！」

彼の声が響き渡った。幸い近くには誰もいなかったためその声は袖しか聞こえなかったが。

しかし柚は意外にも冷静だった。何も言わずにただ彼を見る。

彼が力が抜けたようにしゃがみ込み小さい声でこう言った。

「お願いだから、あいつに会わせてくれよ……」

それはまるでずっと大事にしているものを失くした子供のようだった。何度も繰り返し返すようにそう呟く彼に彼女の居場所を言いそうになるがやはり口を閉ざして柚は彼を横切り歩き出す。

ほんとうにこれで良かったのだろうか。

確かに自分は彼女のことを何も知らない。学校が同じになったこともなければ彼女と会話した時間はごく数分。そんな短時間で彼女のことを分かったつもりの方がおかしいだろう。

しかし何となく彼に自分の口から彼女の居場所を言っではいけないと思った。そう、ただなんとなく……。

(…ごめんなさい)

こんなこと言って……自分勝手に……彼女のことを知ってしまった……。

柚は何度も心の中で彼に謝罪をした。しかしその言葉は無念にも彼には届かない。

その次の授業に彼の姿はなかった。

足りない言葉（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

短い??…いつものことですね（笑）もしかしたら書き直すかもし
れません…。

あれほど焦がれていたのは

一錠の薬が入っている小瓶をベッドの上で寝転んで眺める。

これは四年前に一通の手紙とともに渡された薬。そう、これを飲めば仮の姿から解放されて真の姿に戻れるのだがそれを今まで飲めずにいる自分はなんて情けないのか。十年前は元の姿に戻るために、そしてあの黒い髪のアザナが素敵な女性に告白をするために死にもの狂いに自ら組織の情報を集めていた。

それなのに今じゃ元に戻るのが怖くて最終的にあんなことをしてしまった。

それは何年も元の姿の自分を待っている人達が本当に今でも待っていてくれているのか不安になったのだから。

それとも

コナンはフツと鼻で笑って隣に置いてある携帯を開くと一枚の画像を見る。

四年前の卒業式に撮った少年探偵団と博士が仲良く映っている写真にはやっぱり彼女の姿も映っていて。最初は相当嫌がっていたが歩美の一生懸命なお願いにとうとう折れてしまい最初は歩美と二人で、そして次に少年探偵団五人と博士の六人で写真を撮った。

そういえば写真を撮った後、彼女は泣いていた。元太や光彦、あの涙もろいである歩美まで泣いていなかったというのに彼女はまるで心まで子供になったように、でもとても静かにずっと涙を流していたのだ。

「哀ちゃん泣かないで？これからもずっと歩美と一緒にいるから」

だからね…悲しいことはないんだよ。

歩美の言葉を聞いてますます涙が止まらなくなったらしく両手で顔を押しさえて「ごめんなさい」と何回も繰り返すように彼女は言った。

あの時は卒業式を迎えるのが悲しくて泣いているのかと誰もが思っていた。コナンも彼女は小学生を味わったことがないと聞いていたのできつと思つた以上に小学校生活が楽しかったので別れを迎えるのが寂しかったのだらう。そうばかり思っていた。

そしてその次の日。彼女はいなくなった。三通の手紙と一つの薬を残して。

手紙は博士宛と少年探偵団宛とコナン宛。別れの手紙。

そしてコナン宛の手紙には薬のことを書いていた。

『解毒剤が完成しました。』

薬を飲んだ後の管理は博士の手紙にすべて書いています。

飲むか飲まないかあなたが決めてください。』

たつた三行の文章。それ以外は何も書いていなかった。

(博士や歩美たちの手紙にはお詫びの言葉が書いてるのに俺には何もなしだよ…)

そう思つた瞬間、手紙の下の方に何かが滲んだ痕を見つけてコナンはハツとした。

この痕はまさしく彼女の涙の痕だ。彼女は泣きながらこの手紙を書いたのだ。

昨日の涙の理由は小学校を離れるのが悲しいのではなく、自分たちの前に姿を消すのが辛かったのではないのか。それほど彼女にとつて少年探偵団や阿笠博士、そして蘭達と一緒にいる空間があまりにも居心地が良すぎたのだらう。

そう思うと何故かとても悔しい気持ちになった。彼女の気持ちに気付けてあげられなかったからか。それを止められなかったからかコナン自身も分からない。

でも目の前の薬だけを置いて失踪してしまう彼女に怒りもあった。

そして彼女が姿を消してから四年の月日が経ったとき、このことを何も知らない少女が彼女に接触した。

コナンは少女に彼女の居場所を問い詰めるが彼女は口を開かず「教えない」と一言だけ言った。

「お前に灰原の何が分かるんだよ!!」

コナンは怒りを震わして少女に言った言葉が自分にものしかかる。

そうだよ、自分は彼女の何が分かるのか

あの卒業式の時も何も分からずただ泣いている彼女の本心を知らなかったのに。

もしかしたら一番彼女を知らないのは自分なのかもしれない。

(…やりきれなえな)

ベッドに沈みながら思った。

今でも泣きそうになっている自分に嫌気がさす。

それほどに自分は誰かを失うのが怖いのか。

その時、携帯のバイブが震える感触がしてディスプレイを見る。着信相手を見てコナンは少し細目になりつつも発信ボタンを押した。

「…もしもし」

「おお工藤!! 元気にしとったか?」

「…お前: 俺はもう工藤じゃねえよ」

「あー悪い、つい癖でなあ」

相変わらずの能天気な声にコナンは小さくため息を吐く。

「で? 俺に何か用か?」

「…なんかほんまにつれないなあ」

(今は電話なんかしてる気分じゃねえんだよ)

ただの世間話そうだから電話を切って携帯を隣に置く。しかしまたバイブ音が聞こえて再度ため息を吐いて再び電話に出る。

「おい!! 勝手に電話切んなや!!! まだ要件終わってへんちゅう

ねん!!」

「…あ?要件?」

「そや、いやな、四日くらい前なんやけど俺東京に行つてな」

「ふうん」

「…あ、本当は用事済ませた後にお前に会おうと思つたんやけどな
んせ時間がなかつたもんやから…」

「…切るぞ」

何か服部の話がまた別の方に行つていような気がして脅しかかると焦つたように「すまんすまん」と言い服部は話を戻す。

「それでな、用事も終わったことやし大阪に帰ろうと思つたら…

見つけたんや」

「見つけた?」

「そう、お前がずっと探していたあの子に」

服部が言った言葉にコナンは目を大きくする。

「…まさか」

震える声で一言を発すると服部は得意げな声でこう言った。

「あの灰原っていうちっこい姉ちゃんにな」

反射的にベッドから起き上がる。カランと落ちた薬の小瓶にも気もくれずコナンは問い詰める。

「どこに!?あいつはどこにいた!?!」

声を荒げるコナンに服部は「落ち着け」というが彼女が消えてから四年の月日が経っている。これで落ち着けるわけではないだろう。服部はため息を吐く。

「今から言うから落ち着かんかい。彼女は…」

服部がすべてを話した後、コナンは驚いたように目を見開けた。

あれほど焦がれていたのは(後書き)

タイトル提供 確かに恋だった

自分自身に嘘はつけないと知りながら

哀は学校の帰り、偶然段ボールの中に入っている猫を見つけた。とても小さくて多分子猫が生まれて育てきれなかった人が捨てたのだろう。その猫は弱弱しく、しかし自分がここにいるのを主張しているかのように強く鳴いていた。

段ボールの中には毛布と空になったお皿がちょこんと置いてある。前の飼い主が与えたミルクがあつたのだろう。弱っているがまだ生きている、そう考えるとだいたい捨てられて2、3日くらいだろうか。

とにかく急いで近くのペットショップでミルクを買って子猫に飲ませなくては。あと毛布もこんな薄いものではなくてふかふかしたものがいい。

「ちよつと待っててね」

弱っている子猫を優しく撫でると哀は急いでペットショップに行く。

そうして子猫の元に戻ってきたのはそれから1時間くらい後だった。昔の毛布をよけて分厚い毛布を下に敷いた後、家で作ってきたミルクを新しいお皿に注ぐと相当お腹が空いていたのかすぐにミルクを飲み始めた。

「…良かった」

哀は安心してその子猫を見つめる。真っ白でふわふわでまるで雪のような猫。多分ラガマフィンだろうか。あまり猫のことを知らないけど昔ペットショップで見た猫と似ていた。

そして子猫はお腹がいっぱいになったのだろう、ふかふかの毛布の上に丸くなり眠った。

少々戸惑いながら子猫に触るところばゆい感触に哀は目を細めて微笑む。

「ごめんね、私の家も貴方を飼うことが出来ないの」

でも安心して、私が毎日ここに来るから。ミルクもちゃんとあげるわよ。

そう言うと子猫は笑ったような気がした。

それから一週間が経とうとしている。急に雨が降り、傘を持参してこなかった哀は少しばかり雨に打たれながら子猫がいるところへ向かう。幸いに捨てられた場所は既に閉店していた店の前で入口にオーニングもつけられていたため子猫は濡れずに済んだ。

「お腹すいたでしょ？」

哀が子猫の近くに行くとき子猫は喜んで哀の近くに寄る。もう一週間もここに来ているので顔を覚えたのか。哀が手を出すと擦り寄るようにその手に近づいた。そんな子猫が可愛くて頭を撫でると「ニャー」と鳴いた。初めて会った時より元気な声。それだけで哀は少し安堵した。

すぐさま新しいミルクをやると子猫は勢いよく飲み始める。やはり生まれたばかりなので食べ盛りなのか、それかこの子猫が食いしん坊なのだろうか。たくさんあったミルクはもうあと少ししか残っていなくて哀は四年前まで一緒にいたあの体系が大きい食いしん坊の男の子を思い出した。

そしてミルクを飲んだ後、哀はしゃがんでぐっすり眠る子猫と一緒に雨が止むのを待っていた。この調子じゃ当分雨は止まないだろう。自分が家に帰った後のこの猫の様子も気になる。

「…やっぱり傘は必要かしら」

オーニングがあるといつてもやはり閉店された店。少しばかり生地が薄くなっている。これではいつオーニングの生地が破れてもおかしくないだろう。

明日の学校の帰りにコンビニでビニール傘を買って店の前に置いておこう。もしもの場合役に立つかもしれない。

それか今住んでいるマンションの近くにこの子を移動させようか。それだつたらわざわざここに来なくても済むし、こんな雨でもすぐに様子が見られる。もしかしたらこんな人通りの少ないところよりマンションの近くの方が人通りも多いので見つけた誰かがこの子猫を拾ってくれるかもしれない。

そう考えて雨が止むのを待つがやはりなかなか止まず、むしろ強くなつていく一方だ。

二人きり、正確には一人と一匹の空間。哀は子猫に触れると少しだけ寂しい気分になった。

そういえば小学一年生の頃もよく動物に触っていた。その時は必ずと言っていいほどあの子たちがいた。彼がいた。

自分の身勝手な行動で全てが失つたのは分かる。だけど薬を完成した以上自分はいんなの前からいなくなつた方がいいのだ。

大体元々組織にいた人間はあの人たちの近くにはいけない。あんな優しく暖かい空間に自分はいない方がいい。自分なんて…

そう思いながら子猫を見てフツと悲しそうに微笑む。

「寂しいね、お前も…私も」

優しく子猫の頭を撫でるとピクリと子猫の耳が動いた。

その時、哀は気付かなかつた。目の前に影があることを。

「…何が『寂しい』だ。バー口」

上から聞こえた声に哀は目を大きくする。

この声、まさか…

そう思い、ゆっくり見上げるとそこには今まで避けてきた人たちの一人である人物が立っていた。

「…く、工藤…君」

震えながらも発した声に工藤と呼ばれた人、江戸川コナンはピクリ

と眉を動かす。

「やつと会えたぜ…灰原」

自分自身に嘘はつけないと知りながら（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

なみだは雨に隠して

目の前にいる彼を見ただけで血が一気に引いたような感覚に陥った。

何故ここが分かったのか。

哀は明らかに動揺していた。四年間誰も知られずにここまで来たのに何故急に彼の知り合いに会い、そして彼に会ってしまったのだらう。

「灰、原」

彼が傘をゆつくり上げると眼鏡をかけた工藤新一がそこにいた。そう思っても仕方がない、だってあれからもう四年もの月日が経っているのだから。

胸の奥が熱くなるのが分かる。心の片隅で嬉しいと思う気持ちが真っ先に出るがその後黒い闇がその気持ちを覆う。

ダメ…自分を赦しちゃダメ。

もう彼の傍にいる必要がなくなった以上、あの場所に戻ってはいけない。

哀は泣きそうになるが必死にこらえて彼を逸らすように下を向く。

そう、これ以上干渉してはいけないのだ。

何故彼は解毒剤を飲まなかったのか分からないが彼には蘭という大切な人が待っているのだから…。

雨の中、子猫を置いて行くのは少し躊躇があったが、それ以上に彼の自分を見る目が怖かった。哀は何も言わずに立ち上がり、この土砂降りの雨の中傘も差さずに彼の横をすり抜けて逃げるように走った。

オーニングを抜けると一気に全身が濡れて服が水分を含んで重くなり、足は気持ち悪いが今はそんなことを考えている暇はない。早く彼の元から離れなくては。

必死に走って近道をしようと少し狭い路地に入った瞬間、腕を掴まれ後ろから引つ張られる。咄嗟に後ろを向くとやはり彼の姿がそこにあった。

「逃げんなよ」

先ほどまでであった傘は子猫の近くに放り投げたのだろう。彼は濡れのまま言った。

そして逃げられないように先程より腕を強く握られる。鈍い痛みが腕にかかって哀は少し顔を歪めた。

「…痛い、放して」

「嫌だね」

誰もいない二人だけの路地の中、雨の音だけが響き、お互い一步も譲らないまま時間だけが経っていく。

そして先に口を開いたのは彼の方だった。

「…戻ってこいよ、博士もあいつらも心配してる」

誰の家に住んでいるのか分からないけど、博士を心配させるのはお前にとって一番しちやいけないことなんじゃねえの？

それにあいつら…特に歩美は今でもお前のことを探しているぞ。いつも探し終わったあとに博士の家について言うんだ。「今日も見つけられなかった」って泣いて。

だからさ…頼むから…。

いつもより低い声を出して彼は哀に言う。

しかし哀は下を向いたまま反応を示す気配がない。

先ほどよりも強く降り続ける雨に二人の体は浸食してゆく。それも

気にしている余裕もないと思った瞬間、何か温かいものが全身を包み込んだ。気付けば哀は彼に抱きしめられていた。

「こんな細かい体で全部抱え込むなよ」

そう言つて彼はより強く哀を抱きしめる。

久しぶりに感じた彼の体温。

そうだ、あれは四年前の卒業式。自分が泣いていたときに彼は抱きしめて自分の涙を隠してくれたのだ。

(温かい…)

哀はそう思い、目を閉じると自然と涙が流れた。それは雨とともに消えてゆく。

そして彼の背中に手を回そうと思ったとき、また黒い闇が自分の頭の中に支配されていく。

お前は彼を絶望の底に落とした。彼だけではなく彼の大切だったあの人さえ不幸にさせた。そんなお前に幸せなんか願つてはいけない

頭の中で聞こえてくる声。その声はまるで子供のころの彼の声そっくりで哀は恐怖のあまり抱きしめられていた体を思いきり引き剥がした。

思った以上に彼の力が強かったため大よその力を使ったので少し息が上がる。

「…お願いだからもう私に関わらないでちょうだい!!」

哀は息を整えるとそう叫んで路地裏へと走って行った。

あれからどのくらい走っただろう。気づけばもう自分の家の前にいた。後ろを見たが彼はもういなかった。追いかけるのを諦めたのかそれとも…。

哀はずぶ濡れのまま鍵を開け、自分の家に入る。いつもなら誰もいないため薄暗い部屋も今日は明るい。奥からテレビの音が聞こえて哀はタオルで自分の体を拭くことも忘れてリビングを見ると先客がいた。

「やあ、こんなずぶ濡れで何をしていたんだい？」

「赤井さん…ここへ来る前はちゃんと連絡してって何回いったら分かるんですか？」

先客、赤井秀一の顔を見るなり少し呆れて立っていると頭からバスタオルが被される。哀の問いかけを無視して「風呂でも入れ。風邪ひくぞ」と言っつて、またソファに座った。

「で？何の用ですか？」

シャワーを浴びて私服に着替えた後、まだ寛いでいる赤井にそう告げると「ここは私の買った部屋だぞ」と笑いながら返してくるその態度に少しだけムツとした。

確かに現役高校生の哀のお金ではこのような部屋を買いえるわけはななく言い返せる言葉もない。目の前の人物が恩人と言っつてもいいくらいだ。

哀はコーヒーを淹れるために台所に行きつつも話はやめない。

「あなたがここにいと援助交際しているって噂されて不快なんですけど」

「まあまあそんなこと言うなよ。それにもうすぐ彼女の命日でもあるからな。ちゃんとお墓に行きたいのだよ」

その言葉に哀は息を詰まらせる。そう、あれからもう十年の月日が経とうとしていたのだ。

「そう…もうすぐなのね」

そう言っただけ目を向ける先には一枚の写真。

綺麗に笑う一人の女性の写真だった。

そして次の日、子猫の様子を見に来たらもう子猫の姿はなかった。

なみだは雨に隠して（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

前話からですが遂にコナン君と灰原さんがご対面。
もしかしたら貴重かもしれません（笑）

ときめきのひとひら

一週間ぶりに彼に会った。

それは学校の帰りの出来事。ペットショップから出ていく彼を偶然見かけた。

そう、彼はあの出来事から一週間、学校に顔を出していなかったのだ。音信不通で心配した担任も何度か足を運んだが、彼が出ることはなかったらしい。

でも近所の彼と親しい人によると心配する必要はないらしいが…でも心配だ。

なんせあんなことがあった直後だ。もしかしたら自分のせいでひきこもりになってしまったのではないのでは？と思ってしまう。

「大丈夫だって」

智慧は明るく袖に言うがますます心配になって授業にも集中できない自分がいた。

どうにかして彼に謝らなくては。

そう思つて通学路を歩いている矢先、彼に出くわしたのだ。

会ったのはいいものの何を話していいのか分からない。まずは自分のしたことを謝ればいいだけの話だが、話しかけてももしかしたら無視されるかもしれない。

アタフタしながら、しかしジツと彼を見ながらその場に立ち止まっていると彼と目が合った。

「あ…」

自然と零れた声に反応したのか彼は目を丸くして、微笑む。

(…怒つて…ない?)

それが無性に嬉しくて、でもまだ心配になりながらも小走りに彼の元へ駆け寄る。

彼は両手にいっぱいペット用品を持ちながら袖にいつものように「よお」と言った。

「江戸川君…もしかしてこの頃休んでいるのって…私のせい？」
そして彼と一緒に歩き始めたとき、思い切って本題に差し掛かる。
本人は「へ？」という顔をして袖を見た。多分袖が何を言っているのか分からないのだろう。もしかしたらあの争いを忘れてしまっているのかもしれない。

意外な反応に袖は少し力が抜けた。少なくとも彼が長期間休んでいたのは自分のせいではないとホツとする自分に心の中で苦笑いをする。

未だにわけの分からないと思っている彼に「何でもない」と誤魔化したのはいいものの、

(やっぱり久しぶりだから緊張するなあ)

途中まで同じ道だったため一緒に帰ることになったが会話が見当たらない。彼は会話がなくても平気そうだが袖は一言でも多く話したいのだ。

彼のことをたくさん聞きたいけど聞き過ぎたら絶対に不審がられるし、でもこんなチャンスめったにないわけだし…。

「あ、あの…」

「ん？」

思い切って口を開いたが何を話せばいいのやら…頭がパンクしそうな状態になりながら下を見ると彼が持っている袋の中にキャットフードが見えた。そういえば今日見かけたときもペットショップから出て行っていたような。

「…江戸川君って猫飼ってるの？」

買い物袋を見ながら言う柚に彼は「ああ…」と言ってキャットフードが入っていない買い物袋の中身を袖に見せる。そこには猫じやらしや首輪、あとはエサを入れるプラスチックの食器などが入っている。

「三日前くらいから飼ってたの」

「…三日前から？」

「本当はもつと前から道具を買いたかったけど、猫って飼ったことないから何を準備すればいいのかわからなくて」
そう言っただけで笑う彼は袖は不審に思っていた。

確か三日前も彼は学校を休んでいたのだ。

学校を休んで猫を飼った？それほど彼は猫が好きだったのか。それに彼の顔を見ると、なんだか上機嫌だった。

「江戸川君って猫好きだったの？」

「いや、好きでも嫌いでもねえよ」

「それじゃ何でそんなに機嫌がいいの？」

そう問いだした袖をコナンが見て、微笑んだ。

「…やっと見つけたから」

そう発した彼の顔は子供みたいに凄く無邪気で袖は目を見開いた。

まさか…

「…江戸川君、もしかして」

そう言いかけた瞬間、「コナン君！！」と遠くから女の子の声が聞こえた。歩美だ。横断歩道の向こう側にもかかわらず大きな声で彼の名前を呼んで大きく手を振っている。

「あ、それじゃ…私急いでるから…」

「ああ、じゃあな」

彼と軽い言葉を交わすと袖は逃げるように歩美と反対方向の道を走った。

しかし彼の先ほどの自信に満ちた顔：間違いない。

彼は彼女に会ったのだ。柚はそう思った。

そしてなんだろう、この悲しみ。

彼が会いたがっている彼女に言ったのは紛れもなく自分なのに。

「あー…もう分かんない」

柚は走っていた足を止めて空を見る。

空は少しだけ泣いていたような気がした。

ときめきのひとひら（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

このお話を読んでくださっている皆様、お気に入り登録して下さっている皆様、本当にありがとうございます> (´) (´) <嬉しい限りです。

文章力があまり良くありませんが、今後ともよろしくお願いいたします!!

出会えなかった貴方へ

「…本当にゴミ屋敷だね。こじ」
独り言を呟いてはたきで上に乗っている埃を下に下ろしていく。マスクとゴム手袋を装着しているのは柚。前の家の書斎を掃除していた。

幼い時に住んでいた家には今は父方の父母が住んでおり、もう歳も80近くになるので掃除するのは厳しいと柚の父が無理やり母と柚を連れてきて今に至る。

父は力仕事があるリビングを。母は今、お風呂掃除をしていて柚は残ったこの書斎を掃除しているのだが。

「本当に本がいっぱいある」
本棚にはたくさんさんの難しそうな本があり本棚に入りきらなかったものもある。端に積み重なれているたくさんの本に柚はため息を吐く。
この状態ではまだまだ終わりは先になりそうだ。

(とにかくいろいろな本を古本屋さんに売らなくては)
しかしどれが必要なのか、どれが必要ではないのか分からない。申し訳ないが祖父と祖母に来てもらおうと立ち上がると奥にある段ボールが目に残る。

(他の本は無残に散らばっているのに何でこれだけ…?)
柚は少し不思議に思って段ボールの中を開けるとそこには懐かしいものがあつた。

「これ…私が読んでいた本」
小さい頃に読んでいた絵本や小学生のころに読書感想文に書いた本。

他にも思い出がある本がたくさんあり柚は啞然する。

「もう処分したと思ったのに…」

段ボールの中から本を何冊か取り出してペラペラと本をめくる。なんとというか懐かしい。

（これなんかよくお母さんに読んでもらっていたよなあ……この本は小学校入学したときに買ってもらった本だ）

何冊か読んでいたら懐かしい気持ちになって掃除をしていることも忘れてしまい、段ボールに入っていた本は次々に段ボールの外に出されていた。

そしてまた段ボールの中を探ると何か分厚いものに手が触れる。

「…何これ？」

それは本棚に並んでいるものに似ていて本に厚みがある。見た目的に難しそうな本だった。何ページか捲ってみたがやはり眠くなりそうな字がいつぱい書いている本だ。

「もしかしてお父さんの？」

そう呟いたが段ボールの中にある他の本は紛れもなく自分のもの。

それなのに一冊だけ父の本が入っているのはおかしい。

（でもこんな本、昔の私が読めるはずは…）

またペラペラとページを捲っていると本の間から一枚の写真が落ちる。

「…ん？」

その写真を拾い上げて見る。その時柚の目が大きく開いて首を傾げた。

「…江戸川君？」

そう、そこには彼が写っていたのだ。そしてその隣には幼い自分がいて、多分幼稚園くらいだろう。

今の彼は自分と同じ歳だからこの人が彼なわけはないと理解している。けどあまりにも似すぎていて柚は鳥肌が立つようだった。

「でも…この世には同じ顔が3人いるっていうしね…」

(ドッペルゲンガーとか…あ、でもそれだったら江戸川君とこの人があつたら不味いのじゃ…)

口角を引きつらせながらその写真を見て裏を捲るとそこには字が記されていた。

『工藤新一、倉本柚、19 . 10 . 15、別荘小松邸にて』

「工藤：新一？」

(どこかで聞いたことのある名前。もしかしたら有名人かもしれない)

柚はポケットに入れていた携帯電話を取り出してインターネットで『工藤新一』と検索すると彼のことがたくさん書かれていた。

『高校生探偵』や『ホームズの生まれ変わり』など絶賛する文章があちらこちら。しまいには工藤新一のファンサイトなどがあつた。

(名探偵…?)

柚はハツとしたようにもう一度写真を見る。

(そうだ、私は一度、生の工藤新一の名推理を聞いたことがある) 記憶の扉が開かれた。昔、殺人事件に遭遇した柚の前に現れたのが工藤新一。工藤新一はスラスラと事件を解決して、犯人逮捕まで追い詰めた。

そしてそれに感動して工藤新一に言ったのだ。

『ねえ、どうやったらお兄ちゃんみたいに推理が出来るの?』

柚がそういうと工藤新一は一瞬キョトンとした顔をしたがすぐに笑ってこう言った。

『んーそうだなあ…シャーロックホームズの本を読んでいたらかな?』

『しゃーろっくほーむず?』

『そう…あ、もしよかったらこれ持って行けよ。貸してやるから』

『ありがとう!お兄ちゃん』

そういつて渡されたのはこの分厚い本だった。工藤新一は袖の頭を撫でて『お前がでかくなったら読めるから』と言って去って行った。これが袖と工藤新一の最初で最後の出会い。

あまりにも幼かったため顔もあまり思い出せないが名探偵は工藤新一以外誰にも会っていない。その自信だけはある。

(返さなくちゃ)

袖はその本を持ち書齋を出ると、自分の鞆の中にその本を入れた。

工藤新一の居場所は分からないが手がかりならある。

(江戸川君なら何か知ってそう。そんな気がする)

そして次の日、袖は昨日の本を片手に持って彼を呼んだ。

着いた場所は袖が彼と初めて会った屋上。『立ち入り禁止』と貼っている紙にも目もくれずにドアを開ける袖に彼は少しだけ苦笑いをした。

「それで？用って何？」

彼の放つ声に袖は顔を強張らせる。

(…大丈夫、何を怖がっているのよ、私！)

そうただ彼に聞くだけなのに怖がる必要なんてない。しかしなんだろう、この嫌な気持ちは。聞いてはいけないような気がするのはいのせいだろうか。

袖はそんな気持ちは無視して大きく深呼吸をすると、恐る恐る彼に尋ねる。

「ねえ…江戸川君と工藤新一って…どんな関係なの？」

袖がそれを言った瞬間、彼が驚くようにこちらを見たのが分かった。

やっぱり聞いてはいけないことだったのだろうか。

それから沈黙が続きメガネの奥の彼の目が見えない。

(やっぱり控えた方がよかったのかな)

そう思ったが、時すでに遅し。嫌な予感によく当たると世間は言うものだ。

(いつまでもここにいてはますます彼と気まづくなる)

そう思った柚は「ごめん」と一言放ち、屋上から出て行くつもりとき、

「親戚だよ」

後ろから彼の声が聞こえてきて柚は咄嗟に振り向いた。

「親戚…?」

「ああ、遠い親戚…だった」

「…だった?」

「……そう、だって新一兄ちゃんは」

その後には放たれた彼の言葉に柚は目を丸くして片手に持っていた本を落とす。

そして本の中に挟んでいた写真が少しだけはみ出した。

出会えなかった貴方へ（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

終りを告げる鐘が鳴る

この一か月の間、よく人に会う。今になって自分がこの町に頻りに訪れているからだろうけど。

哀は目の前の女性に聞こえないようにため息を吐く。今日この町に訪れたのは博士の様子を見に來ただけであって、こつやってお茶をしている暇はない。

しかしこんな優しい人にそんな言葉を投げつけることはできずに今に至るといわけた。

「だけど本当に久しぶりだよな？元氣だった？」

「あ…はい、一応」

二人きりで会話をするのは初めてかもしれない。いつもこの人そばには彼がいたから。それを頼りに自分も目の前の女性とあまり会話をしていなかった。

毛利蘭は探偵事務所を通り過ぎる哀を見て急いで家を出て哀に話しかけた。

「哀ちゃん久しぶり！！四年ぶりだよな？…本当に綺麗になっちゃって、コナン君見惚れちゃうかもね…あ、せつかくだから近くの喫茶店でお茶でもしない？哀ちゃんが急いでなかったらだけど。」

悪意のない笑顔でそう言われて断れる輩がいるのだろうか…一人だけ思い当たる人はいるが。

哀は目の前のコーヒーを飲んで蘭の顔を覗き見る。

あれから……本当の彼がいなくなって十年の月日が経つ。27歳になった蘭は四年前より綺麗になっていて哀も声が出せなかったくらいだった。

(彼女はまだ本当の彼の帰りを待っているのだろうか。)
そのままジツと蘭を見ていたら目が合つて、すぐに逸らした。一瞬、
嫌味っぽいかな?と思つてまた蘭を見ると蘭は優しく微笑む。その
笑顔がまた綺麗で罪悪感に浸された。

あれから工藤新一の行方はどうなっているのだろうか。蘭はまだ
工藤新一の帰りを待っているのだろうか。
口に出したくてもなかなか出せない。真実を知るのが怖かった。

「そつえば…博士は元気?」

「え?」

「この頃全然会つてないからね…元気かな?つて。あとあの子たち
や…コナン君も元気にしてる?」

そつ言われて哀は驚くように蘭を見る。

彼やあの子たちは蘭に言つてないのか、自分が勝手に失踪したこと
を。確かに先ほど会つたときも蘭はそんなに驚いていなかったよう
な気がする。

ああ、と哀は思った。

みんな優しく、残酷だ。これじゃ自分がここに戻ってくるように
仕向けているようではないか。

「博士は今日様子を伺いに行こうと…あとあの子たちには私も全然
会つてないから…彼も」

「…そうなんだ」

少しの沈黙の後、哀は時計をチラリと見て席を立つ。

「すいません、それじゃ博士の家に行かなくちゃいけないので…」

「あ、ごめんね。長話しちゃって…」

「いえ、コーヒーご馳走様でした」

軽く蘭にお辞儀をして後ろを向く。店を出ようと思ったときに「あと後ろから声が聞こえて、肩を掴まれる。蘭に引き留められたと分かり、また蘭のいる方へ振り返った。

「どうしましたか？」

「ごめんね、言い忘れたことがあって…」

「言い忘れ…？」

蘭はそう言って鞆の中からメモ用紙を取り、スラスラと何かを書いていく。そしてその紙を渡されて不思議になりながらそれを見ると住所と日時が書いていた。

「あの…これは？」

哀は蘭に尋ねると蘭は悲しそうな顔をしてポツリと呟いた。

「…三回忌」

「え？」

「あいつの三回忌が行われるの」

そう言われた瞬間、哀は背筋が凍りつくような感じがした。

まさか、あいつって…

そう言おうとする前に蘭が口を開いた。

「そうか…哀ちゃんは教えてもらってないんだね。もう、たとえば一回も会ったことなくても哀ちゃんには伝えてねってコナン君に言ったのに…」

無理に笑う蘭はとても痛々しく見ていられなかったが、それより自分のこの嫌な気持ちをどうにかしたかった。

この先を聞きたくない。

そのような気持ちになって耳を塞ぎたかったが、哀の気持ちなど分かるはずもなく蘭は静かに口を開いた。

「…亡くなったの。二年前に…工藤新一が」

その一言で哀の心が冷えてくるのが分かった。

「死ん…だ？工藤…新一…が」

「そう、死体は見つからなかったけど…行方が半年くらい見つからなくて、二年前に新一のお父さんが死亡届を出したみたい」

「…」

「急なこと言っちゃってごめんね。面識はないと思うけど…哀ちゃんが出来てくれたら新一も喜ぶと思うし」

「…ありがとうございます」

それだけを告げて喫茶店を出ていく。哀はもう博士の家に行くことを忘れて足は駅に向かっていった。

死んだ…本当の彼が死んだ。自分のせいで、自分があんな薬を作ったせいで…。

「工藤新一は…私が殺した…」

誰もいない部屋の中、一人ポツリと呟くその言葉に心が締め付けられる思いになった。

その時、後ろにあった写真立てが床に落ちて大きな音を立てて壊れた。壊れた写真立てのガラスが所々に散らばったが哀は動く気配もなくその写真をじつと見る。

大切な人と自分が仲良く映っている写真。この写真は最初で最後の一枚だった。

「…お姉ちゃん、会いたい」

そう呟いた彼女の瞳に光などなかった。

終りを告げる鐘が鳴る（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

物語もだんだん終わりに近づいています

空気が、痺れた（前書き）

少しだけ血表現注意です

空気が、痺れた

目の前の出来事に袖は頭が回らなかった。ただ、彼女を追ってきただけなのにどうしてこんなことになってしまったのだろう。

それは一時間前に遡る。

(…よし、これで用事は終わり…と)

ふうと一息ついてカードを改札口に翳す。

学校の帰りに親から頼まれた用事を済まして音楽を聴きながら携帯で親へメールを送った。

用事とは母がお友達の家ハンカチを忘れてきたので取りに行つてという簡単な用事だったが道のりがあまりにも遠い。しかも電車通学ではなく徒歩通学である袖は母親からの頼みを一瞬嫌な顔で聞いていたが母親も仕事があるということでは仕方なく承諾した。

そしてメールをした一分後、調子のいいお礼の返信が来て袖は苦笑いをする。

母親のよく忘れ物をする癖は直してほしいと思いつながら携帯を閉じると反対側のホームを見て小さく「あ」と言葉を零した。

ホームの反対側にいたのは紛れもなく彼女だった。

彼女に会うのは一か月ぶりだ、と言つても会つたのは一回しかないけど。と心の中で突っ込みを入れる。

しかし初めて会った時もそう思ったが彼女は本当に美人だ。多分自分の学校の中を探してもこんなに綺麗な人はいないだろう。しかも中身もとてもクールでそれがもうオーラに出てしまっていて今だつて…

(今…だつて?)

柚はそこで一旦思考が停止する。

ちよつと待つて…何かがおかしい。柚は思った。彼女の様子が、表情が、なんというか暗いような、生きている感じがしないような。瞳に輝きが見られなかった。

会ったのはたつた一回だけ、会話も三十分程度で終わった。知り合いとては言い難い関係なので気のせいだとは思ったが、でもこのまま彼女から目を離すと駄目な気がした。

柚の中で嫌な予感がしたのだ。

(…よし!!)

あまり乗り気にはならなかったが彼女のことにも心配だから…とイヤホンを外して彼女に気づかれないように反対側のホームに足を運んだ。

胸騒ぎが少しだけした。

電車に揺られて三十分、駅から歩いて一時間、だんだん人気のない道に差し掛かり柚の胸騒ぎもだんだん大きくなる。彼女はまだ柚の存在に気づいていなく周りを気にせず早足で何かに導かれるように歩いていく。

そして着いたのは人気のない倉庫がたくさんあるところだった。中

には屋根が崩れているところもある。一体こんなところに彼女は何をしに来たのだろうか。そして自分はこんなところに来てもいいのだろうか。

不安になりながらも周りを見渡して他に人がいないか確認するがやはりこのようなところに人なんかいるはずはない。

(やっぱり灰原さんに声、掛けた方がいいよね)

何でこんなところにいるか聞かれたら偶然と装うことにしよう。でもこんなところに偶然っていうのもおかしいか…。それじゃ本当のことを話して…って絶対に不審がられる。

頭を悩ませながら柚は懸命に言い訳を考えるがそれよりこの胸騒ぎの方が大きかった。

(まあ…言い訳は会ってから考えてもいいよね)

そう思い彼女が歩いて行った方向を見るが既に彼女の姿はなかった。それと同時に自分の中の胸騒ぎが大きくなる。

嫌な予感がまた、した。

柚はすぐさま走り出して倉庫一つ一つ探し始める。それでも彼女は見つからない。もしかしたら引き返したのかもしれないと思ったがそれなら鉢合わせになるはずだ。きっと彼女はまだここにいる。しかし、彼女の気配はどこにもなかった。

そして探し始めて十分が経つ。未だに見つからない彼女の姿に柚は必死で涙が出そうになったが堪える。

(あともうちよつと…)

まだ探していない倉庫もあと少しになり奥にある倉庫に近づいたとき、入り口付近に何かが落ちていた。

(…携帯…電話?)

それは白くてストラップもなにもつけていないシンプルな携帯電話。まさかと思った。携帯電話を自分のポケットに入れ、携帯電話が落ちていた近くの倉庫を覗く。そして袖は衝撃的な光景を目の当たりにした。

「灰原…さ、ん？」

震えが止まらない。頭の中が真っ白になっているのが自分でも分かった。

袖の目線の先には、血まみれで倒れている彼女がいた。

空気が、痺れた（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

宮野明美さんが殺された場所がよく分かっていない…（汗）

諦めにも似た、（前書き）

少しだけ残酷な表現あります

諦めにも似た、

有名な大型病院の301号室。そこに彼女は眠っていた。ピツピツとリズムよく医療機器が動いているのを見て少し安心して
いる自分がある。

あの光景を見たときには恐怖を感じて動けなかった。

「…灰原さん!!」

このような事態を経験したことがなかったので何をすればいいのか
分からず、ただ名前を呼ぶことしかできなかった。涙をポロポロ流
しながら彼女の肩を揺さぶるが既に意識がなく、柚はより強く揺さ
ぶった。その時、

「あまり揺さぶるな!!」

後ろから声がした。

「…哀くん!!」

病室のドアから勢いよくドアが開く音と、男の人の声が聞こえて柚
は咄嗟にドアの方を見る。そこには小太りの老人と、後ろには綺麗
な黒髪の女性がいた。

「あ、えつと…」

いきなりの登場で柚は何を言えばいいのか分からずに二人を見る。

老人も袖に気づいたのか慌てた様子を無理やり落ち着かせ、彼女の眠るベッドに近づく。

「ちよつと危険な状態だったので…命に関わることはないみたいです」

それを聞くと二人は安心して、老人は「良かった」と言いながら涙を流した。

ああ、この人が彼女の保護者なのか。袖は思った。失踪したと言っていたので、きっとこの老人も彼女を探していたのだろう。

でもそもそも何で彼女は自殺なんてしようと思ったのだろう。あの手首に刻まれていた傷の深さは尋常じゃなかった。あれはリストカットしようとしたものではないと袖にも分かる。

そう考えていると老人の傍にいた女性が袖に近づいてきた。

「ありがとう…えっと、」

「あ、倉本袖…です」

「倉本さん…私は毛利蘭、そしてこちらの人が阿笠博士。よろしく…っていうのも可笑しいわよね」

「…そんな」

「とにかく、本当にありがとう。貴方のおかげで哀ちゃん、命に別状がなくて…本当に良かった」

「いえ、私なんて何も…すべてあの人がしてくれましたから」

そういつて袖はドアの向こうを見る。

「そういえば…」

「あ、彼なら灰原さんの無事を確認してから自宅に戻りました。服とか血だらけだったのでそのままずっとついているのもなんだと言つて」

「そう…でも哀ちゃんがこうなったのも私もせいかもね…」

その言葉に少し目を開く。袖だけではなく博士もどという意味なのか分からず蘭を見た。

蘭は彼女の傍に寄って彼女の髪を優しく撫でる。それはまるで母親
みたいで一瞬柚は蘭に釘づけとなった。

「ど、どういことじゃ…?」

動揺を隠せない博士は蘭に問う。蘭は表情を曇らせて言った。

「私、最近哀ちゃんに会ってね…言っちゃったの…：…新一が死んだ
って」

「新一…?」

新一ってあの…。

一週間前に昔の家で見つけたホームズの小説。その中に工藤新一と
の写真が中に入っていた。

まさか…工藤新一の…?

その本が入っている鞆をギュツと握る。

まさか…!!

柚は口を開いたとき、ボスツと博士が隣のベッドに崩れるように腰
に掛けて下を向いた。

「そうか…哀くんは知っていたのか…」

「…ごめんなさい」

ハハハと力ない笑いが博士の口から零れて蘭は博士を見て申し訳な
さそうな顔をする。

「いいんじゃないよ、いずれ哀くんの耳にも入ると思っていた。蘭くん
は何も悪くない。むしろ感謝しておる…ありがとう」

優しい笑顔を向けて言う博士に蘭は涙を流した。

柚はそんな二人をただ見ていた。

そしてまた静寂が訪れる。彼女はまだ眠っていた。

諦めにも似た、（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

じつするより他になかった

次の日、柚は初めて学校を休んだ。否、サボったと言った方が正しいだろう。

転校してきたばかり…と言ってももうここに来てから半年だが、小さいことでも何かと目立つのを避けていたばかりに学校も風邪以外は毎日のように遅刻もせずに来ていたようするのに優等生みたいなものだった。一回だけ授業をサボったことはあるがそれ以外は先生も感心する生徒だったような気がする。

そんな柚が今は有名な大型病院の前に立っていた。

自分がここに来たからと言って彼女の意識が戻るわけではないと分かっている。そして自分は血まみれで倒れている彼女を見つけただけで彼女となんの関係のない人だとも。でも足が勝手に動いたのだ。そして気が付いたら学校の交通手段でも何でもない電車の中にいてこの病院に向かっていた。

病院に着いたのはいいもののさすがに彼女の病室まで行く勇気がなかった柚は病院の玄関前で立ち往生していた。一步病院に近づいたと思っただけまた一步病院から離れる。そんな繰り返しで周りからみたらまるで不審者だ。しかも制服まで着用しているのだからもしかしたら誰かが警察に連絡するかもしれない。そういう方面で目立ちたくはないがやはり彼女の様子が気になる。

学生靴を強く握って睨むように病院を見るとやはり何人かはこちらを見ているような気がした、その中に柚とはまた違う学校の制服を着た女の子が。

(あれ?)

柚はその女の子と目があつた。その隣には女の子と同じ制服を着用

している男の子二人の姿が見られる。それにしてもどこかであったことのあるような子だと思つと袖はすぐにハツとした。

(吉田歩美ちゃんだ!!)

2か月くらい前に学校の前に初めて会つた。最近彼は猫を飼い始めたと聞いたときにもチラツと見た。袖はなんとなく会つのを避けたのでほんの少しだけだったが。

歩美も袖の姿を見て「あ」と言葉を漏らしながら袖に近づいてきた。

「袖ちゃん!!久しぶりだね!!」

病院の玄関前に来たかと思つとすぐに袖の手を取つて嬉しそうに微笑む歩美はとても可愛らしい。袖も自然と笑顔が零れるくらいだ。

それよりも歩美が自分の名前を覚えていてくれたのが一番の喜びだった。

「久しぶりだね…元気だった?」

「うん相変わらず!!」

「へへへ」とはにかみながら二人は笑う。その奥から歩美を呼ぶ声がかして二人は思い出すようにそちらを見ると何が何だか分からない様子の二人が歩美たちの前に立っていた。一人は少し体格の大きい男の子ともう一人は細身で頬にそばかすがある男の子だった。

「二人でなにやってるんだよ…っていうかこいつ誰だ?」

体格の大きい男の子が少し目を細くして袖を見る。それがまるで睨まれているようで怖かったがそれをフォロウするようにそばかすの男の子が体格の大きい男の子の前に立ちはだかる。

「もう、元太君はいつもそういう言い方ですから駄目なんですよ!!」

「…たく、光彦だつていつも説教ばかりで嫌になるぜ」

「もう!!元太君も光彦君も喧嘩しないで!!」

そのような感じで三人が言い合っている中、袖は何をどうすればいいのか分からなかった。三人をただ見ているしかできなかった。

三人の口論が続く中、それを止めたのは近くにいた看護婦さんだった。あまりにも騒がしかったため注意されたのだ。袖を合わせた四人は「すいません」と言い、とにかく病院の中庭に行くことにした。

「ごめんね…袖ちゃんまで注意されちゃって」

「いいよ、大丈夫だから」

「…だからこいつ誰なんだって」

「あ、そうだったね！！」

歩美は思い出したように言い、袖を男の子たちの前に立たせる。その横に歩美が並んで袖の肩を持った。

「この子は倉本袖ちゃん。コナン君と同じ高校で確か…コナン君と同じクラスだったよね？」

「あ、うん。よろしくお願いします…」

ペコリと軽くお辞儀をすると歩美は微笑んで次は男の子たちを指差す。

「そしてこのちよつと大きい人か小嶋元太君でその隣が円谷光彦君私と一緒にコナン君と哀ちゃんのお友達なの」

「もちろん私のお友達でもあるよ！」と元氣よく歩美がさういって元太は明るく、光彦は丁寧にあいさつを交わす。

三人、彼と彼女を合わすと五人は小学生からの幼馴染らしい。よく事件とかにも巻き込まれて、それを次々と解決してきた少年探偵団だったらしい。その事件の中で彼は大いに活躍したと歩美は言った。確かに学校でも頭はいいが幼いころからこんなにも凄い人だったとは知らなかった。また彼女も小学生とは思えないような知識を持ち合わせていて大人たちも圧倒していたらしい。それにしてもある意味この少年探偵団は凄いと袖は苦笑いをした。

「さういえば袖ちゃんはどうしてここに来たの？誰か知り合いのお

見舞い？」

四人で話をしている中、歩美の言葉で柚はハツとした。そうか、歩美たちはまだ博士や蘭に聞いていないのだろう。

柚は急に言葉を詰まらせて歩美を見ると歩美は不思議そうな顔をして柚を見る。他の二人も同様だった。

この場で彼女のお見舞いと言ったら絶対に不審がるだろう。歩美はまだ柚と面識がないと思っているのだから。

「あ、えーと…」

誤魔化すようにそんな相槌を打っていると向こうから女の人が歩美たちを叫んでいる声が聞こえてくる。その声に聞き覚えがあり柚もそっちを見ると黒髪の女の人が走ってくるのが見えた。

「あ、蘭さんだ」

歩美が向こうを見ながら口を開く。

そうだ、昨日病室で会った人だ。蘭も来ていたのかと思っているとここまでたどり着いた蘭が肩で息をしながら嬉しそうな顔でこう言った。

「哀ちゃんの意識が戻ったの」

彼女の意識が戻った。その事実を聞いて柚は喜びの半分彼女に対しても不安もあった。

あの痛々しい手首の傷は何のためにつけたのかそして彼女が自傷する前に柚が見た光の宿っていない彼女の瞳の意味は一体何だったのか…彼女を見た瞬間にきた胸騒ぎをまた感じた。

「同じするより他になかった」(後書き)

タイトル提供 確かに恋だった

さよならが加速する

急いで歩美たちと病室に行くと、博士が涙を流して彼女に抱き着いている光景を目にした。それを見て歩美も良かったと涙ぐんでいる。彼女の意識が戻ったと言ってみんな安心しているのか、誰も彼女がこのような行為を行った理由を問いたださなかった。それを見て柚の不安は消えて病室を後にする。

そういえばその中に彼の姿は見えなかった。彼は一体何をしているのだろう。真面目に学校に行っているとも思わないし、もしかしたら…。

ここから彼のいると思う場所までそんなに時間はかからない。いてもたってもいられなくなり柚はその場所に向かうことにした。

柚が足を運んだ先は彼女が自ら命を絶とうとしていた場所：倉庫だった。たくさんある倉庫のうち彼女がいたのは一番奥にある古ぼけたところ。何故そこを死に場所にしたのか未だに分らないがそれにはきつと何かの理由があるのだろう。そしてその理由を彼は知っている。だってそうじゃなければ…。

とにかく今は彼を見つけるのが先決だ。彼女の意識が戻ったことを伝えなくてはならない。ポーカーフェイスをしているが多分一番心配していたのは彼だと思うから。

柚は一番奥にある倉庫を目指して足を進ませる。本当は一度あの光景を見てしまった場所には二度と行きたくなかったがもうこれ以上関わってしまったのだから進むしかないと思った。

何に？と言われれば柚自身も分からないがなんとなくそのような気がしたのだ。柚の前に大きく立っている彼と彼女の壁。迷惑だと思っ
うがそれを壊してあげたいと心の底から思った。我ながらお節介だ
など彼に言われそうだが柚は彼の笑顔が見たいのだ。好きな人には
幸せになっしてほしい。もちろん彼女も同じで。

そう思っているうちに目的の倉庫に着き、柚は息をのむ。もしかして後追いをして彼も手首を切ってしまったら…なんて一瞬思ったが彼はそのようなことをする人ではない。そう確信しているからこそこの倉庫に行けたのだ。そして倉庫の中を覗くと案の定彼の姿があった。

彼の足もとには一輪の菊の花が置いており、その隣にはトルコキキョウの花束が置かれている。その光景を見て柚は大きく目を開いた。もしかして彼は…。

そう考えて早足で彼の元に行く。彼女はまだ亡くなっていない、意識も戻った。だから花なんて置かないで。

何故か泣きそうになる柚の足音が聞こえたのかそれとも気配を感じたのか、彼は柚に背中を向けたまま言葉を発した。

「今日は命日なんだ」

その言葉に柚の足も止まる。

「命…日？」

「そう、今日でもう十年になるよ…本当に早いよな」

「…誰、の？」

恐る恐る聞くと背中を見せていた彼が振り返る。その時の彼の表情に柚は目を丸くした。

彼は泣きそうな顔をしていたのだ。

聞いてはいけないことだったのかと柚は少し口をつむぐ。しかし彼は泣きそうな顔で微笑んでもう一度花束を見ながら言った。

「灰原のお姉さん」

その一言で柚の頭の中の疑問が繋がった。何故彼女はここで命を絶とうとしたのか分からなかったので不思議に思っていたがそういうことだったのか。不謹慎ながら納得してしまった自分に少し腹が立つ。

「そうなんだ…」

そして色々教えてもらったというのにそれしか返せない自分も嫌いだ。

泣きそうになる目を必死で堪えてジッと彼を見る。一番泣きたいのはきつと彼だろう。そして病院にいる彼女も…きつと大声で泣きたいんだと思う。でもそれが出来ないのは性格からなのか、それともそして彼はしゃがんで地面に付着していた彼女の血痕を指でなぞる様に触る。もう一日も経って乾ききったその赤は昨日の光景を思い出されるようにあった。

「…俺とあいつが出会ったのはこの人が原因なんだ」

「え…？」

「灰原のお姉さんは殺されたんだ、そしてその後に俺がここに駆け付けた。そのあとすぐに彼女は息絶えたんだ」

彼は未だに彼女が残した血痕を見ているため表情が分からない。で

もきつと辛いだろう。しかしそんな辛い話を無関係な袖にしているのだろう。袖自身も分からなかったがそれを彼に聞こうとはしなかった。そして彼女のこと

「…灰原さんの意識が戻った」

袖は彼にそれを伝えると一瞬彼の肩がピクリと動いたがすぐに安心したかのように「…そう」と言った。

袖は花束のあるところの前まで来て一礼する。そして下を向いている彼に向かってまた一礼をすると倉庫を後にする。

一瞬彼の頬に涙が見えたような気がするがきつと気のせいだろう。

袖はそう言い聞かせて倉庫の外へと足を運んだ。

さよならが加速する（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

明美さんが殺された場所って原作とアニメで違うことが最近分かりました。

色を映さない瞳

彼女が自傷行為をしてから三日が経った。相変わらず歩美達は学校に行かずにずっと彼女に付きっ切りと蘭から聞いて柚は苦笑いと彼女のことをどんなに大切にしているか痛いほどに分かった。と言って柚も相変わらず学校帰りに彼女の病室を覗いているのだが。

「柚ちゃんは哀ちゃんのところに行かなくてもいいの？」

「え？」

休憩所でココアを片手にのんびりと景色を眺めていたとき、後ろから声がして振り返るとそこには大きな紙袋を持った蘭が立っていた。

「あ、蘭さん。こんにちは」

「こんにちは」

蘭は笑顔で挨拶を返して両手に抱えていた紙袋を置くと柚の向かい側の席に座ってまたニコリと笑った。そんな蘭に柚も無理やり笑顔を返す。

「蘭さんも灰原さんのお見舞いですか？」

「…も？」

「あ、さっき歩美ちゃんたちが来ていたもので」

「ああ、歩美ちゃんたちまた学校サボったのか…」

「いくらなんでもそろそろ無理やりにも学校に行かせなきゃ…」

と小声で呟くように言う蘭の顔は少し怖かった。

そつえば前に歩美ちゃんが言っていたが蘭は空手の黒帯らしい。過去に何人も犯人を回し蹴りなどで倒したそうなの。

たまに思うが歩美たちといい蘭と言いい頻繁に事件に関わっていたのが凄くと思うのは自分だけなのだろうか。と柚は固まったままそう思った。

「あの…」

恐る恐る声を出すと蘭は我に返ったように袖を見て苦笑いをする。

「ごめんね、つい…」

「いえ…それよりこの紙袋はどうしたんですか？」

袖が指差すところには先ほど蘭が持つてきた紙袋。蘭もそれを見て「ああ」と声を発するとその紙袋をテーブルの上に置いて袖に中身を見せる。そこには着替えや本や雑誌がたくさんあった。

「哀ちゃんの着替えや退屈しのぎのものを持つてきたの。博士は忙しいみたいだから代わりに」

「へえ…灰原さんきつと喜びますよ」

「……そうだといいんだけどな」

「へ？」

袖の言葉に急に蘭が悲しい顔になってポツリと呟いた。その言葉の意味がよく分からなくて聞き返すと蘭は外ではしゃいでいる子供たちを見る。

「哀ちゃん…意識が戻ってから一言も喋らないの。私や歩美ちゃんたちが哀ちゃんに話しかけても口を開こうともしない」

「…えっ？」

まさか、そんなこと

そう言いかけて口をつむぐ。

袖も毎日病院に来ていたがたった一回しか会話をしたことがない彼女とまた直接会うのは気が引けたので遠くで様子を伺っていただけだった。少し自分で不審だなと思ったが気になるものは気になるのだから仕方がない。

しかし彼女が一言も喋らないのは…袖にまた不安が襲ってきた。

「鬱…ですか？」

「どうだろう、本当に何も話さないから…でももしそうだとすれば私のせいだね」

「そんな…蘭さんのせいじゃないですよ」

今でも泣きそうになる。泣きたいのは蘭だというのに本当に自分は泣き虫だ。

「あの…江戸川君は？」

「コナン君は全然来てないの。哀ちゃんが目を覚ましてから一回も顔見てないから」

「…そうですか」

多分そうだとは思ったが彼は一体何をしているのだろう。今まであんなに必死になって彼女を探していたのにやっと会えたと思ったらこれだ。彼の考えていることが全然分からない。普通なら毎日彼女のところにお見舞いをするはずなのに。

そう考えていると蘭が「よし」と言って立ち上がる。そしてまたニコリと笑って袖に手を差し伸べた。

「じゃあそろそろ哀ちゃんのところに行こうか」

「…あ、えーと」

蘭がここに休憩していてからなんとなく想像できていたが、いざ彼女の元に行こうと誘われるとなんというか…戸惑う。口角を引きつりあげながら蘭を見ると蘭は表情を変えずに「早く」なんて言っって手をさらに前に出す。それに負けて袖は蘭の手を取った。

本当に来ても良かったのか。

袖は頭の中で何回もそう呟く。例え一回会ったとしても、血まみれの彼女を助けたとしても所詮は赤の他人。干渉されたくないだろう

彼女の元に行くのは勇気があったのにそれも構わず蘭は彼女のいる病室をノックする。奥から歩美の声が聞こえてドアを開けるとそこには三人の姿とベッドにいる彼女の姿が目映った。

「あ、柚ちゃん!」

「こ、こんにちは」

歩美が柚の元に駆け寄り強く手を握る。

「今日はどうしたの?知り合いのお見舞い?」

そう聞く歩美に柚は苦笑いをして蘭は不思議そうに二人を見る。そういえばまだ歩美たちに言っていなかったなと柚は思ってからリとベッドにいる彼女を見た。彼女はチラリと柚を見ると少し眉が動いたが直ぐにそっぽ向き外を見る。

本当に何も喋らないのか。

もしかしたらと思ったがやっぱり友達でも何でもない赤の他人相手に心を開いてくれるわけがないかと寂しそうに彼女を見る姿に蘭は気づいたのか、柚の肩を押して彼女の前に立たせる。

「哀ちゃん、彼女は倉本柚ちゃんと言って哀ちゃんを助けてくれた人なの。ちゃんとお礼言ってるね」

「え、あのっ」

そう言う蘭に慌てて何か言おうとするけど言葉が思いつかず何を言っているのか分からなくなった。初めて事実を聞かされた歩美たちは目を丸くして相当驚いている様子だ。そして彼女もそれを聞かされた瞬間、ピクリと指が動いた。そして睨むように柚を見る。

「お、お礼なんてしてもらおうとは思ってません」

彼女に睨まれて少しだけ怯んだが目を逸らさず彼女を見ながら言う。「だけど…」

蘭は戸惑いながら柚に言うが「それではお先に失礼します」と一言いい病室のドアに向かって歩いていく。本当は足が震えてうまく歩

けなかった。歩美たちには気づかれていなくても蘭には多分気づかれただろう。

しかし一刻も早くこの病室から出ていきたくったのも事実。そしてドアのノブに手を触れたとき、

「…なんで私なんか助けたのよ」

突然聞こえた声に柚は振り返る。他の皆もその声の主に目を向けていた。

「哀…ちゃん？」

歩美はゆっくり声の主の名前を言った。

彼女が三日ぶりに声を出した。皆は驚きながら彼女を見て、また柚も同様にドアに手をかけた状態で視線は彼女の姿を捕えていた。

そして彼女はまた口を開いた。

「なんで…死なせてくれなかったの？」

色を映さない瞳（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

涙だけは嘘を吐かない

『なんで死なせてくれなかったの?』

そう言う彼女は怒りと悲しみが混合したような顔で袖を見た。袖は彼女から目が離せない状態であり、周りの皆もその言葉に驚いている。

「な、何言ってるのよ、哀ちゃんたら!!冗談が過ぎるよ!!」

ぎこちない笑いをしながら一番に口を開いたのは歩美だった。強く彼女の手を握って作り笑いをしながら言うが彼女は歩美を見ようとせず、ずっと袖を見ている。

そんな彼女に袖も答えるようにドアのノブを離して正面から彼女を見る。そしてまた沈黙が走り時計の音だけが聞こえる病室の中、袖はゆっくりと息を吸った。

「…だつて目の前で誰かが倒れていてそのまま見捨てられるわけないよ」

「それが迷惑だつて言ってるのよ。そもそも何であんなところにいたの?私をつけてきたの?」

「そうだよ、悪い?」

大人しくて気の弱い自分がこのように彼女と真正面から話していると思うと信じられなかった。いつもなら『ごめん』や『そうだよね』で終わらせてしまうのだけど何かが頭の中で何かが切れたのだ。

袖が放った言葉に彼女は少し眉を動かした。布団のシーツを握りしめる力も強くなったらしく少しだけシーツに皺が寄っている。

「悪いに決まってるでしょ!?!彼に私のことを聞いたのか分からない

いけどもう私に関わらないで!!」

悲痛な叫び声が病室中に響いた。そんな彼女に歩美も恐怖を感じたのか握っていた彼女の手をゆっくりと放した。しかし柚は彼女を怖がりもせず傍に歩み寄る。そしてベッドの横に立つとしっかりと彼女の目を見て言った。

「嫌だ、貴方が死にたいと思わなくなるまでずっと付きまといてやる」

その目は怒りを越していたようだった。まるで何かに取りつかれたように話す柚に彼女は下を向き、より強くシーツを握りしめて歯を食いしばる。

その姿は今まで見たことがない彼女の嘆き。柚も思いきり学生鞆を握りしめた。

本当はそんなことを言いたくもなかった。彼女と仲良くしたかったがその彼女が自ら命を落とそうとしているのだ。そんな甘えたことは言っていられない。出来るものなら彼女には命を落とさずに幸せになってほしいから。

しかしそんな想いは今の彼女の心に届かない。そんなの承知の上だったが凄く悲しかった。

柚は眉を潜めると彼女は柚の腕を強く握った。

「何で…何でそんなにしつこく私に関わろうとするの!? 私が死ぬが何しようがアンタには関係ないでしょ!？」

彼女は思いきり強く握っているつもりなのだろう。しかしその力は弱くて痛くもなかった。自分より細い腕を見て柚は顔を歪める。

そして何も言わずにずっと握られている腕を見ている柚に彼女の苛立ちが増した。

「もう放っておいてよ!! 私はこの世にいてはいけないのよ…生きる価値さえないのよ!! だから…ッ」

言いかけた瞬間、パンツと大きな音がした。その光景に皆は目を大きく見開く。

柚は恐る恐るその方向を見たらそこには蘭がいた。蘭が彼女の頬を叩いたのだ。そう理解するまで時間はかからずジツと蘭を見る。

「…いい加減にしなさい」

いつもより低い声で言う蘭はかなり怒っている様子だった。

頬を叩かれた反動で横を向いたまま止まっていた彼女はどんな表情なのか分からなかった。そんな彼女にもお構いなしに彼女を叩いた手をゆっくりと下ろして蘭は言う。

「前から哀ちゃんのみんなを避けていたのは知っていた。特に私とコナン君を避けていたのも知っていたよ…でも…でもお願いだから死にたいなんて言わないで…お願いだから…新一の分まで生きてよ…もう大切な人が死んでいくのは嫌なの…」

蘭が言い終わった時にはもう顔をくしゃくしゃにしながら泣いていた。彼女は何も言わずゆっくりと顔を泣いている蘭に向ける。

「何でそんなこと言うの？」

そして次に声を発したのは彼女の傍にいた歩美。歩美も目からポロポロと涙を流しながら再度彼女の手を強く握って続けた。

「私…哀ちゃんのこと大好きだよ。たとえ四年間姿を晦ましたとしてもずっと友達だと思ってたもん！だから…そんなこと言わないで？」

歩美が言い終わるか否か下を向いて声を殺しながら泣いていた。それを宥めようと光彦と元太が歩美の傍に駆け寄る。そして彼女を見て口を開いた。

「歩美ちゃんの言うとおりです。僕たちは仲間じゃないですか」

「そつだぞ！俺たちは五人で少年探偵団なんだ。一人でも欠けたら少年探偵団じゃねえんだよ！！だからそんなこというな！！！」
元太の強い口調に彼女は三人を見る。下を向いていた歩美もゆつくりと顔を上げて、元太と光彦も強い眼差しで彼女を見ていた。小学生のころは好奇心大勢で呆れるくらいに事件に突っ込んでいたが今は一体どうなのだろうか。しかしひとつ確信したことはこの四年のうち立派に成長したということだ。学校を無断で休んでいるのは感心できないが小さいころより落ち着きがあり何より表情が大人になっている。そんな三人に彼女は目が離せないでいた。

「哀ちゃん、もう一度やり直そう？」

静まり返る病室の中、蘭はポツリと言った。

「私…ううん、私たちは哀ちゃんが何でこんなことをしたのか分からない。でもね、このまま自分の殻に閉じこもっては駄目だよ。哀ちゃんには私や博士や柚ちゃんや歩美ちゃんたち…そしてコナン君もいるじゃない。だからね」

蘭は包帯で巻かれている彼女の左手首をそつと触れて目を細めながら彼女を見る。そしてゆつくりと口を開く。

「もう一度、あの楽しかった頃にみんなと一緒に戻ろう」

その瞬間、彼女の頬に流れるものを見た。まるで緊張の糸が取れたみたいに目からポロポロと涙が溢れて頬に流れた。蘭は彼女の頭を優しく撫でた後、彼女の肩に腕を回し優しく包むように抱きしめる。

「ごめ、ん…なさい」

その言葉を何回も繰り返す彼女は蘭の背中に腕を回してまるで子供のように声を上げながら泣いた。

その光景を見て袖もまた緊張の糸が切れたように一筋の涙を落とすた。

涙だけは嘘を吐かない（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

あと二話くらいで終わります。番外編も書こうか検討中…。

遠回りのハッピーエンド

哀は外を眺めていた。

目線の先には幼い子供たちが遊んでいる光景。自分も十年前はよく少年探偵団と一緒にいた。あの頃は何かしらよく事件に遭遇して大変だったが、キャンプや外食、組織にいたところに体験出来なかったことをたくさんしたのでいい思い出にもなっている。

今日は珍しく誰も見舞いに来なかった。

歩美たちはいよいよ加減学校をサボると単位が危ないため仕方なく学校へ行き、蘭は仕事で博士は発明の発表のため、二週間帰ってこないと聞いた。

この頃哀が口を開き始めたため柚も安心して病室には来ていない。きつと遠慮しているのだろう。しかし前にあんなことを言ってしまったため謝りたいとは思っている。柚には非はないのだから。

そう思ってたただ外を眺めていると日が赤くなっていることに気が付いた。先ほど外で遊んでいた子供たちもトボトボと病院に入っている。く。

夏だと言っても夜は冷える。哀も窓を閉めてベッドに戻ろうとしたとき、ドアが開く音がして咄嗟に顔を上げるとそこには珍しい見舞い人がいた。

「…久しぶりね」

ドアの前には照れくさそうに顔を逸らしているコナンの姿がありその手には一輪の赤いアネモネの花。それを見て何だか笑えてきた。

彼が花なんて似合わないのに一体どんな気持ちで花屋になど行っていたのだろう。そう思うとコナンは何か察知したのか、少し頬を赤らめた。

それから会話が続くわけでもなく沈黙が走る。

そして面会時間もごく僅かになり外も暗くなってきたとき、哀は窓の外を見ながら呟くように声を発した。

「…夢、見たの…お姉ちゃんの夢」

その言葉に反応するようにコナンは哀を見る。彼女は何かを懐かしむように遠くを見てそして目を閉じて頬杖をついた。

「お姉ちゃんは遠くで私をジッと見ていた。その瞬間、すぐにでもお姉ちゃんのところに行きたかったけど…何故か足が動かなかつたの……」

どうしてかしら

そういつてクスクス無理に笑う哀を何も言わずにずっと見ているコナン。そのとき、クスクス笑っていた哀の声がだんだん啜り泣く声になっていった。

「動かない自分の足を恨んだわ…どうしてって…どうして動いてくれないの!？って…そして必死にもかく私を見てお姉ちゃんは言つたの…『ここに来ちゃ駄目』って…微笑んで」

哀が振り向いた瞬間、コナンの顔が少し歪んだ。彼女の頬を流れる水は紛れもなく彼女が流した涙。いつでも無表情な彼女が珍しく顔をくしゃくしゃにして泣いていた。その顔を最後に見たのは四年前、小学校の卒業式の頃。

「みんな狡いわよね…私がしようとしたこと、簡単に壊しちゃうもの…黙って遠いところに行ったらあなたに見つけられて、自殺しようとしたらあなたのクラスメイトに助けられて…死なせて言ったら彼女が泣いちゃって…もう、どうすればいいのか分からないわ」

「…灰原」

「私はどうしたら工藤新一に罪を償えるの？」

そう言った哀の目はとても悲しそうだった。コナンは目を見開いて哀を見る。

やっぱりそうだったのか

やはり哀は知っていたのか。コナンは真っ先にそう思った。

二年前にコナンは博士と工藤夫妻と相談して工藤新一の死亡届を書くことを決断した。しかしそれを哀に知られると彼女は何をやらかすか分からない。もしかしたら最悪な状況に陥るかもしれないと考えたコナンは決して哀には知らせまいと決意したのだが。

多分蘭や歩美たちあたりに聞いたのだろう。そしてそれを聞いた哀の状態がこれだ。ボロボロになりながらも必死でその答えを探そうとしている。

その姿が見ていられなくてコナンは哀の傍により、強く彼女を抱きしめた。

それでも彼女は泣きやむことはなくコナンの肩を濡らしていく。

静かな病室の中、哀の噤り泣く声だけが聞こえていた。

「…なあ、工藤新一の話をしてもいいか？」

静寂の中で呟いたコナンの声に哀の噤り泣く声がパツと止まる。

それを確認したようにコナンは哀を抱きしめたまま言葉を発した。

「確かに工藤新一は二年前に死んだ。葬式も上げたし、骨のない墓もたてた。正直言うとお前の作った薬を飲まなければ工藤新一は生きていて、もしかしたら蘭や他の誰かと幸せになっていたのかもしれない……」

「……」

「でもな、俺は……否、工藤新一は後悔していなかったと思う。小さくなったから歩美たちと出会って、服部にも出会って……そして何よりもお前と出会えた。お前とこうやって話せるのも、お前と目を合わせられるのもなんかム力つくけど薬のおかげだと思ってる」

「……くど……う、くん」

「だからお前が苦しい時も傍にいたいと思ってるし、俺が辛い時も傍にいてほしいと思う……」

そう言っつてコナンは抱きしめていた哀の体を放し、片手に持っていた赤いアネモネの花を哀に差し出す。

「俺、お前のこと案外嫌いじゃないかもしれない」

大人びた笑顔でそう言っつたコナンに哀は大きく目を見開けて溢れていた涙がまた頬を伝う。しかし哀はすぐに少しだけ微笑んでコナンから差し出されたアネモネを受けとると目を細めてこう言っつた。

「奇遇ね……私もよ」

その言葉に呆気にとられたように瞬きをするコナンに笑いがこみあげて受け取っつたアネモネと顎に近づけて「ありがとう」と小さくお礼を言う。そんな哀にコナンは頭を少し掻いて再度哀を抱きしめた。

遠回りのハッピーエンド（後書き）

タイトル提供 確かに恋だった

次回最終回です。

確かに恋だった

彼女が退院してから二か月が経った。

季節も夏から秋へと変わり、服装も半袖から長袖に変わろうとしている時、二人の少年少女は授業時間にも関わらず屋上でただボーと空を見ていた。会話はなくてただジツと柵にもたれて。

そういえば彼とそういうことをしていることが多くなった。なのでもちろん学校中で「彼と袖が付き合っているかも」とかそんなくだらない噂も流れ始めて、当初は目立ちまくりのこの噂に嫌気がさしたが今となつては免疫力のおかげで慣れてきている自分がいる。

そういえばあの病室で起きた一件以来彼女と一回も会っていないかった。あんな言い方をして彼女はもう自分のことなんて嫌いになつてしまっただろうか…そう思うと二回しか話したことがないが少し寂しい気持ちになる。

「一目でもいいから会いたいな」

無意識にポロリと呟いた言葉に袖はハツとして彼はふと袖を見る。

「なんか言つた？」

「あ、独り言…」

それを言うと彼は「フーン」と相槌を打ってまた前を向く。

まさか彼女のことを思っていたと口にするると彼は一体どんな反応だったのだろう。内心面白くなってきたがやめた。

あれから一度も彼から彼女のことを聞いていないので急に彼女の話

題に触れるときつとびつくりするだろう。そう思って袖はただ空を見た。

「…そういや、灰原がお前にありがとうって言ってくれだって」
「…え？」

しかし、まさか彼から彼女の話題が出るとは思わなかった。袖は目を丸くして瞬きを二回すると彼はそんな袖を見て笑う。

「あいつから聞いたけどお前あれから灰原の病室に行つてなかっただろ？俺はその場に居合わせていなかったからよくわかんねえけど…あと怒鳴つてごめんなさいとも言つてた」

詳細は聞いていなさそうで内心袖はホツとした。否、ホツとするのは何か悪いような感じがするが恐らくその気持ちに近いだろう。そんな袖を知つてか知らずか、彼はまた静かに口を開く。

「あいつ、何かいつも後ろに考えてしまう癖があつて…おまけに素直じゃねえし頑固だし。でもあんなやつでもとても根は優しいんだぜ？だからたまには灰原に会つてくれねえかな？」

一瞬何を言つているのか分からなかった。
目をまたパチパチさせて彼を見ると彼も袖の表情を不思議に思つて首を傾げる。

「会つてくれないかも何も…私も灰原さんに会いたいよ？もつといろんな話したいし…あと歩美ちゃんたちも呼んでご飯とかも食べたいし…でも」

「でも？」

「私…灰原さんと江戸川くんの家も連絡先も知らないよ？」

「…あ」

そうだったと言っているような顔で彼は袖を見た。

そういえばあんなに彼女や歩美たちにも会つていたにも関わらず袖

は彼の家や博士の家を知らないのだ。もちろん彼女が今どこに住んでいるのかさえ知らない。

彼は袖が彼女のことを嫌ってしまっただけに会わなくなったと思っていたが現実はその逆だった。なんだか拍子抜けしたように深く柵にもたれ掛る彼を見て首を傾げる。

「そうだよな…連絡先知らなかったら意味ないよな」

彼はそういつて小さなメモに二つの連絡先を書いて袖に渡した。一つは彼の連絡先でもう一つは…

「いいの？勝手に灰原さんの連絡先教えちゃって」

「いいんだよ。助けてもらって連絡先教えませんって酷すぎだろ」

「…でも実際灰原さんを助けたのって江戸川くんじゃない」

彼女が手首に血を流しながら倒れていたあの時、あたふたしていた袖に叫ぶように話しかけたのは彼だった。そして手際よく彼女の応急処置をしたのも。

袖は救急車に連絡をした以外何もできずにただその場に呆然と居合わせただけ。

「そういえば灰原さんに自分のあの時あそこに居たって言ったの？ふとそのことが疑問になって彼に聞いてみたが彼は「あー」と頬を掻きながら視線を逸らす。その行動はきつと彼女に何も伝えていないのだろう。」

「だってよ…あの時俺がいたって自分で言ったらなんかナルシストみたいで嫌じゃね？」

「でも本当のことなんだからいいじゃない、言っても。もしかしたら灰原さん…江戸川くんのこと好きになるかもよ？」

「ば、バーローー！！俺は別にっ！！」

そうやってすぐに赤くなってくれてこちらもからかいがある。ハハ

八と嫌味に笑ってまた空を見る。

「でもそんなところが好きだったんだけどな」

「へ？」

「うづん、何でもない」

柚は立ち上がって傍に置いていた鞆の中から一冊の本を取り出して彼に差し出す。それは幼い時に柚が工藤新一に貸してもらったホームズの本だった。

「返すよ。もう十年以上たったけどね」

「え？でもこれ俺のじゃ……」

「だって当の本人はいないんですよ？だから親戚の江戸川くんに戻す。いつまでも借りてちゃ申し訳ないしね」

本を彼に寄せると彼は一瞬戸惑ったがゆっくりと本を受け取る。それを見て柚はニコリと頷くと鞆を持った。

「……それじゃそろそろ授業も終わるし戻ろうかな」

「なんか悪いな。お前サボるの苦手なんだろ？」

「いいよ、なんか江戸川くんに会ってから慣れたし」

「……どういう意味だ？」

「そのまんま」

わざとらしくニコリと笑うと彼は思いきり睨んだ。そんな会話をしていたらあつという間に学校のチャイムがなり生徒たちの話し声が聞こえてくる。

「それじゃ……江戸川くんもちゃんと授業受けなよ」

「へいへい」

ひらひらと手を振って屋上のドアのノブを握る。

「あ、倉本!!」

ドアを開けようとした途端、後ろから彼の声が聞こえて振り返ると口元に手を当てて叫ぶ彼の姿が。

「米花町二丁目二十一番地!!」

「へ?」

「俺と灰原が住んでる家の住所。たまには遊びに来いよ!!」
柚の目が見開かれる。なんだ…そういうことか。

「なんだかんだ言ってもうそんな関係だったんだね!!」

「ばっ…ちげえって言ってるだろ!?!」

再び顔を赤くさせる彼に柚は優しく微笑み屋上を後にする。

(失恋…したんだよね)

初恋は叶わないと誰かが言うが全くその通りだ。

しかし失恋すると人は井戸の底に突き落とされたように落ち込むと聞いていたが意外にそんな気持ちにはなれなくて…むしろ心がすっきりしたというかそんな気持ちだった。

(でも…あれは確かに恋だった)

今まで恋愛をしたことのない柚にもそれはすぐに分かった。

あの彼を見るたびにドキドキしたあの日。『灰原』という名前を彼が口にしたときに感じた嫉妬感。そして彼女を見た瞬間に感じてしまった敗北感も…きつとあれは紛れもない恋だった。

柚は廊下の窓から空を見た。
今日も天気は快晴だ。

確かに恋だった（後書き）

タイトル提供　確かに恋だった

完結しました！！最後に灰原さんが出てこなかったのは自分でも残念でしたが…なので番外編書こうか悩んでいます。江戸川さんと灰原さんの会話みたいなやつ。
載せるときは「短編集」に載せるかも。

皆様、最後まで読んでいただきありがとうございます。
多分近々に新作を載せると思いますのでそのときはまたよろしくお願ひいたします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5800o/>

涙のふるさと

2010年12月28日17時22分発行